

現住地 樺戸郡浦臼村

宮崎唯輔氏

神職に身を起して夙に北海開拓に志を抱き、屯田兵を志願して滿期後村役場書記より戸長村長等に歴任し、公共の熱心家を以て村民の衆望を擔ふ、氏も又非凡の人物と謂はざる可らず、氏は明治十一年二月三日を以て郷里に生れ父を政輔氏と云ふ、氏は長男にて家世々神職を務めたり、學業は郷里仁保尋常高等小學校に入り後皇典講究所に轉じて研究する所あり、明治二十九年中北海移住を思ひ立ち二月十一日家族五人と共に渡道屯田兵を志願し小樽に上陸、雨龍郡秩父別屯田第一大隊第一中隊に編入せられしは同年四月廿九日なりき、卅五年現役滿期後夕張郡長沼村役場書記となり勤勉の聞を高く終に空知郡音江村戸長に轉任せり、四十一年七月十二日樺戸郡浦臼村戸長に轉任し、四十二年四月一日二級町村制を施行せらるゝや氏は同村々長に任命したり、三十七八年戰役當時音江村戸長在勤中盡力勤なからず賞勳局より銀盃一個戰役の功に依りて下賜せらるゝ、又秩父別小學校建築費十圓余を寄附し北海道廳長官より木杯一個及び褒狀を下賜せられ、東北三縣凶作に接し寄附する所あり三縣知事より木杯一組を贈られ長沼小學校建築費へ寄附する所あり褒狀を受け、又長沼村役場在勤中公共事業に盡瘁の廉を以て同村より銀盃一個及びブロンズコト一着を贈與せられ、音江村戸長在勤中學校整理に

盡力の廉を以て金銀を寄贈せられたり、而して今猶は浦臼村々長に在職中にて村内の人望頗ぶる厚し

郷里 德島縣名西郡浦庄村大字下浦

現住地 石狩國夕張郡角田村第六農場學田

宮本久太氏

德島縣人は其人物多くは勤儉にして忍耐に富み、夙に本道に渡りて幾多の艱苦を嘗て若々勝を制し、所謂成功家と稱するもの乏しからず、氏は安政三年十一月一日を以て其郷里に生る、父幾藏氏は明治三年五月二十日氏が十五歳の時五十五歳にして歿し、母やそ子は十八年十月七日六十三歳にして歿す、氏が家は世々農を業とす、寛文の頃三代の祖千藏神職と爲り、庄太夫、角太夫、治太夫に傳ふ高祖父伴七其の父藤次郎と云ふ祖父藤右工門に至る十一代より世々農に歸し、威望郷黨に高し氏九歳の時神職山口對馬に從ひ學を修むること二年、父の病に因り廢學して農業に専事し、代藏士武市庄一氏の監湖全部を引受けて、福岡佐賀、熊本地方へ販賣せるも全然失敗に歸し、加ふるに母大病の故を以て歸宅し、爾來その家に在つて農業に従事すること十三年、此間土地調査の爲め選れて同村役場土地調査總代となり熱心其職責を盡したりき、明治廿八年四月本道移住を志ざし角田村阿野呂の宮本龜吉氏に身を寄り農業に従ひ、同年六月札幌農學校學田地に入り密生繁茂して一徑の小路だに無き樹林

(二八五)

地に入り熊龍の襲來すると戦ひ苦心經營し開拓の功成り以て今日の境に達しぬ、此故を以て、其徳一郷に高く、夙に選れて、村會議員、村農會議員となり付治地方農事の改良に盡し、又農學校學田地六十戸の組長たる外、第十部長及び學校世話係の職を帯ぶ、茲に學田地精農者たるの廉を以て銀盃一個と金五十圓を農學校より賞賜せられ、農業經營顯著の故もて道農會より木盃一個を受け、農學校學田地成業紀念碑の建設に金十三圓を寄附し、學校建築に多大の盡力を爲し、日露戰役に際して五十圓の國債に應募し、寺院の壇徒總代として常に宗教慈善の事に努むるは、以て公共事業に忠實なるを知るに足らん、氏二男あり長を藤衛と云へ次を藤二と云ふ、室は同縣石井村葛西嶋治氏の三女なり、現在の耕地十町歩にして、主として大小豆を自作し、兼ねて澱粉を製造し、其の産業歳と共に發展し進歩の蹟あり。

郷里 讃岐國

現住地 石狩國雨龍郡一己兵村字納内七十九番地

三谷彦三郎氏

三谷家系圖

人皇十二代

景行天皇第十七皇子

- 先祖 第一 神 櫛 王
- 其子 第二 千 磨 命
- 其子 第三 能 磨 命
- 其子 第四 森 葉 磨 命
- 其子 第五 小 枝 大 別 命
- 其子 第六 吉 美 大 人
- 其子 第七 油 頁 大 人
- 其子 第八 坂 根 磨 磨
- 其子 第九 笠 磨 磨
- 其子 第十 小 櫛 磨 磨
- 其子 第十一 海 磨 磨
- 其子 第十二 浦 津 大 人

(三八五)

人皇二十九代宣化天皇之御宇武家となりて同姓二十八所となる讃岐國寒川郡、三木郡、山田郡に末葉多し神内、三谷、十河植田等皆神櫛王の後裔也山田郡に兄弟三人あり兄は神内と名乗り植田村神内に

一城あり次男は三谷と名乗り池田村に在城す三男は十河と稱し十河村に在城す、于時人皇九十九代後光嚴院の御宇延文中細川相模守清氏は、將軍足利義詮公の執事たりしが佐々木道譽の讒言に依りて疑を蒙り屢々其誤りなき旨を陳上しと雖も將軍家に於て赦免なきを以て南朝に降り命を奉じ、四國を平治せんと先づ堺浦より出帆して讃岐へ押渡り、清氏手兵五百余騎を以て三木郡白山の麓に陣を敷き國中の歸服せしものを招く西尾の城主十河吉良保方の人々參るべき由を申す、清氏悦て面談せしめ盃を賜はらんと云ふ吉良辭して曰く某に二兄あり相伴ひ來るべしとて其後神内右衛門景辰、三谷八郎景隆と共に同白山の營に到り、清氏に相見ゆ時に三寶に槍扇三本を載せ出す十河吉良進んで三寶を押頂き先づ二兄に扇子を與へ一本の扇子を残し、三寶と共に拜戴して退く清氏其舉動を見て十河は末男なりと雖も嫡男の量ありとて十河を以て總領となす、兄兩人は槍扇を以て陣幕の紋となす又十河は三寶に槍扇を紋所とする事を許可したり于時十河吉良は十八歳なり。

人皇百三代後花園院の御宇永享二年三谷彌七郎景晴細川家に仕へ將軍家に候す、其頃西の洞院通りより化鳥飛び來りて禁裏之棟上に止り光を發す御腦ありて畏くも頻りに驚せ給へり、數夜の後之を奏す公卿殿上方御詮議有て上古源三位頼政の鶴を射し例に任せ、武士に命じて射さしむべしとて將軍家に勅あり、于時三谷彌七郎景晴は是世に隱なき精兵なりとて將軍家に命じて參内せしめ景晴殿上の床に登りて化鳥の來る刻限を待つ夜化鳥飛び來りて光を發す、景晴心中に神明の擁護を祈り之を射る誤た

ず中箭して射落す、化鳥は則地上に落つ景晴階を下る時に階を踏躰して墜落するや公卿等曰く化鳥を射て定矢する程なるに心後れたるにやある、今階上より墜落せし何事やと景晴謹んで曰く不肖の身を以て參内なすのみならず、階上に登る事恐懼の余り圖らず墜落せりと答へしかば其言微聞に達し帝威賞ますくて故源三位頼政の官位なれば兵庫頭に任じ給ふ、是より三谷兵庫頭彌七郎と稱す諱は景行帝の十七男櫛王の遺孫なるを以て景の一字を用ひ來る景晴は墳墓地は王佐山麓にして三谷八幡宮は彌七郎景晴の氏神なり。

文明十二年十一月七日寒川左馬之介兵數百を以て池田の城を襲ふ、城主兵庫頭景久里城を捨て王佐山の城に籠る寒川氏三谷の里城に火を放つて王佐山の城に攻め寄せ、此の城嶮岨の高山にして頗少き要害の地なれば寒川氏の軍勝たずして敗し兵士大に討たれて引退せり。

永正五年八月香西豐前守元定香西南條北條の兵二千五百余人、野原の庄に勢揃ひして三谷城に攻め寄る兵庫頭景久三谷王佐山の城に立籠り嚴しく拒く四郡の兵大に亂れて退く、其後天正年中由佐某土佐の長曾我部元親の命を請けて常城を攻む三谷氏は是を坂本川原に防々と雖も敵兵強くして軍利あらず、後大に敗して終に落城するに至れり。

三谷兵庫頭景晴其子兵庫頭景久代々王佐山に居城す、三谷落城の後景久の息右衛門太郎景俊天文年中隠士となりて浪々し大内郡引田郷羽村に居住す、右衛門太郎景俊は川股山龜割之檀に戦死す。

(六八五)

明暦元年末年の出火にて祖先の舊記皆焼失す依てあらく記慰せし事を書殘しもの也。
三谷家の元祖 神櫛王の御陵は三木郡牟禮村の王墓是也。

文政七年二月十五日

明治四十年十月

三谷澤右衛門景定寫之
三谷彦三郎寫之

三谷家は文政年間より明治元年に至る迄に澤右工門と名乗る者三代あり其子三谷澤一郎(當主彦三郎の父)は明治二十六年十月二十六日死歿す。

嫡子彦三郎氏は香川縣の名産たる砂糖製造法に熟練し得て、其名譽帝國に顯れ明治二十六年より同二十七年迄二ヶ年間三重縣廳へ製糖教師に奉職す、其功に依り岩村同縣知事より褒狀に金二十五圓を附して賜はる、其後明治二十八年帝國第三回勸業博覽會に於て製糖有功第二等賞及び褒狀を受く。

嫡子重治氏長するに及び郷關に踰踏し空しく畝園の間に老ゆるを欲せず、北門の新天地に飛躍し子孫百年の大計を開かんを期し、慨然本道屯田兵を志願し明治二十九年中父彦三郎母あさ子二男淳次郎三男寛平四男央長女かや子都合七名の一家を擧て渡道し、石狩國雨龍郡一巳兵村字納内七十九番地に移住す、爾來兵農の勤に盡して比なし後備役に編入せらるゝまでに屢々表彰を受く卅七年日露戰役起るや直に出征、北韓軍に参加して各地に轉戦し凱旋後其功に依り勳八等白色桐葉章に一時金一百圓を下

賜せらる。

二男淳次郎氏は三十七八年の役起るや、現役兵を以て直に出征清國盛京省旅順方面の攻撃戰に第七師團五勇士の一人として同地盤龍山に於ける敵の鐵條網破壊の大任を負ひ、五人齊しく匍伏して鐵條網に忍び寄る時しも十一月二十六日午後十一時頃月光を身に浴びながら第一の鐵網を難なく破壊し、其旨を中隊長根津大尉に報告し續て第二の鐵條網に達し憤闘破壊中哀むべし、敵の彈丸飛び來りて胸部を貫く、是に於てか左手に鐵條網を握り右手に南壁鐵の鉄を持つて身動きもせず立往生の姿勢と成り居るを他の勇士馳せ寄り見しに立つたるにあらず、天晴名譽の戰死を遂けたるなり其功に依り功七級金鷲勳章及勳八等白色桐葉章を下賜せらる、父彦三郎が淳次郎氏菩提の爲め一巳村五丁目一説教所を建立せり、噓淳次郎氏元武門の家に生れ勇士の眞面目を代表したるもの吾人は氏の死して勇名人口に膾炙し餘光家門に及び三谷家の戰死軍人の家として郷黨の畏敬を受けつゝある、之の祖先にして之の子孫あり三谷家の名譽眞に羨むに堪へたり。

郷里 熊本縣上益城郡龍野村大字上早川
現住地 石狩國夕張郡角田村第五農場

白石勝平氏

(七八五)

一大工職人より身を起して辛酸嘗め盡す、十有余年不撓の意氣不屈の精神加ふるに克已勤勉なくんば豈今日の成功を來しあらんや、然り白石氏の成功は一に壯時千辛に耐へ萬難を排し克已勤勉たる賜物も亦大ならずとせんや、氏は九州の人嘉永六年五月十一日生る父源吾氏既に逝す母をささ女と云ふ氏は其の三男に當り、明治三十四年二月本家白石新平氏より分家せられ歳十六歳より伯父の婿に當る茂七郎氏に就き大工職の年期見習ひを奉公する十星霜、偶々北海道拓殖の有望なるを聞知するや雄心禁する能はず、明治二十三年慨然意を決し家族三人と共に生國出發本道に航し小樽に上陸幾奉別に到り後瀧川歌志内岩見澤栗山停車場等に職を働き、翌二十四年六月十五日栗山村杉武一郎氏に傳り同氏の小作農に従事す辛勞五星霜、明治二十八年十二月二十日、現住地たる角田村、農科大學第五農場に轉居して同場附屬地五町歩を獨立耕作の任に當り、爾來拮据精勵茲に漸く農耕家の礎を定め益々豊に成功者を以て目ざるるに到れり、現在耕地五町歩水田三反歩小麥小豆裸麥薯蕷等自作、妻女は同郡中楨の田村本田角右衛門氏の妹たみ入室、嗣子は明治十二年一月十九日同村鈴木繁彌氏の四男直次郎氏を養嗣子として入籍同四十年八月十四日長女まさ子と結婚長孫潔氏を擧ぐ、氏は又公共心に篤く雨煙別小學校建築費に寄附を爲して道廳長官より褒状を受け其の他美事善行枚舉に遑まらず、氏老來意氣毫も衰へず益々本道拓殖界に貢獻せんを期す氏又偉なる哉。

郷里 和歌山縣西牟婁市ノ濱村

現住地 空知郡岩見澤町上志文

庄司長太郎氏

等しく是れ苦心の開拓家なり、而して農耕の成績に大小あるものは一家協力の如何んに依らずんばあるべからず、是れ農耕の人を要し力を要するの所以なり然れども如何に多數の家族を有すればとて父子和せず兄弟親まざれば焉んぞ其の成功を慮ち得んや、見よ庄司氏成功の跡を庄司一家の成功其の耕地の大を爲し得たるもの一に一家協力の結果なり、一家和合の賜物なり荒地を開いて一家和親茲に子孫百年の基を爲す人生の快事何物か之れに若かんや、氏は文久二年六月二十五日郷里に生る先老長平氏は明治二十七年九月二十一日六十五歳にて病死、母さきり女と云ふ万延元年十一月二十五日二十五歳を以て歿す、氏は其の長男に當り初代徳兵衛氏二代與吉氏三代茂七氏四代父長平氏、氏に至る五代の舊家たり、家世々農を経す氏は幼時市ノ濱村小學校に入り五ヶ年修學後家事を補けて農事に従ふ明治二十八年同縣の人山本半次郎氏の北海移住團体を組織するや、氏牙籌を棄て、慨然團体員に加はり同年四月帯ふる處の資僅かに三百五十金六人の家族を擧げて六十四戸の團体員と共に本道に航し、岩見澤村幌向川上流地に於て一方五千坪（則ち一戸分五町歩）の貸下出願許可を受け爾來開拓に従事す當時の幌向川上流の地たる道路もなく又家なく千年の樹林天を掩ひ、唯だ是れ熊熊の巢地殆んど手を下

しの余地なし、氏等屈せず荆を開き樹を伐り銳意力を開拓に盡き辛勞を積む十有余年遂に今日の成功を來しに至る。現に有する耕地二十町歩内水田二町歩小作二戸を入れ貸付料耕地一反歩二町五十錢水田米六斗三十六年一月より更に荒物雜貨店を開始して副業とす。

令聞は同村山本芳助氏の四女たみ子入室、嗣子武助、二男謙三郎、長女とく、二女つま、三女はな、四女はる女の二男四女を榮ぐ、氏は又公共慈善の事に志篤く現に公職は二十一部長村農會議員養蠶組合取締住民組合長青年會總裁師團用蕪麥地方委員等の職に在り、又上志文の教育所設置に際し三回にて五十八圓を寄附道廳長官より木盃三個下賜され上志文教育所教員の費用二年間給與し、道路開鑿費に二十八圓五十錢余寄附日露の役國庫債券に應じる二回、更に又郷里市ノ濱小學校建築費に金三十圓を寄附する等公共慈善の事業に資を投ずる枚舉に違ま非すと云ふ。

庄司一家克く和合愈々事業に精勵して村民の重望を負ひ、名聲漸く高き力を居村の發達に盡して毎日なし氏の如きは眞に終始ある開拓家と云ふべき也。

郷里 岡山縣備中國吉備郡元淺尾村大字小寺
 現住地 石狩國南龍郡一巳村

白山勝四郎氏

己に不毛の地を開いて其資財を作る是れ偉人なり、現んや其勤勉苦辛の跡他の模範となるに於てや氏は明治九年六月九日を以て生る、父を長次郎氏と云ひ母をうめ女と云ふ、氏は其四男に當る、郷里小學校に於て高等科二學年迄を修め退學校十四歳より十七歳に至る迄猶學業を研究す、後農業に従事し北海道に志したるは明治三十年舊二月一日なりき、家族四人と共に生國を出發し小樽に上陸、札幌廣島開墾香江部に於て農業に従ひ、同年十一月十五日同地を出發一巳村多度志石橋農場に移りたり元來氏は白山官治氏(香川縣三豊郡觀音町の入政元年四月生)の養嗣子となりたるにて其渡道も是より先き官治氏が明治廿四年渡道し札幌廣島村に移住せしが故なり、氏は明治四十年五月五日多度志三等郵便局の開始と共に局長なり六級俸を給せらる、又公職としては學務委員、二十六部長、衛生組合長等に任ず、氏は性質温厚篤實にして村内の人望家なるのみならず局長としても頗ぶる熱心勤勉の聞あり、戊申詔書の一たび下るや氏卒先して各部落に勤儉貯蓄を獎勵し空知支廳管内に於ける三等局としては貯金高の多き氏の局を以て一位と稱せられたり、又多度志部落が空知管内に於ける模範的村落を形成せしが全く氏及び氏の長兄中川郡藏氏等の與かつて大いに力あるに依るとぞ、氏の如きは實に開墾部落に於ける模範的有志家と謂つべし。

郷里 德島縣那賀郡今津浦村字黒津村
 現住地 石狩國樺戸郡浦臼村字キナツスナイビラ

庄野梅吉氏

帯ふる處の資僅に四百金は庄野氏成功の基礎たり、殊に志業半ばにして災厄の難に襲はれ殆んど根本より家礎を覆へされたるに届せず、遂に拓殖界に成功したる庄野氏の如何に辛勞したる勤勉したる今にして其の過去を思ふ、氏自らと雖も又撫然たるもの有て存せんや必せり氏は四國の人父を健三氏と云ひ明治十二年十月五十九歳にて生國に歿す、母しげ女は氏が九歳の折早く已に歿したり、氏は其二男に當り嘉永五年六月九日を以て生る、家代々大工職を業とす、氏の學業は元寺小屋時代近藤文五郎氏に就て四ヶ年間學び後大工職を父に習ひ廿五歳の時分家を爲す、明治廿五年三月北海道渡航を思ひ立て生國を出發し家族四人と共に資本金四百圓を持參渡道し、浦臼村キナウスナイ友成農場に入りたるは四月初旬なりき、此處に小屋掛を爲し農業に従事せしが其頃は道路も無く人家も無かりしを以て米附の買入は砂川に出で丸木船にて石狩川を運搬せし也、然るに三十一年九月石狩川大洪水の爲り畑作付農作全部四町五反歩を流失し同時に價額四百圓の馬一頭をも流失せり、依て三十三年三月元の居住地よりキナウスナイピラに移り橋本兵吉成農地を五百圓にて買受け、外耕地新十津川突出十町歩鹽見幸治郎成農地を千二百圓にて買求め、キナウス水田三町五反歩を浦生宗吉より千二百三十圓にて買入れ自作八町歩小作三月入専心農業に勵精せり、氏は公共事業に熱心に且つ慈善事業に出金せしもの

少なからず、鶴沼小學校増築費へ六十圓寄附、徳嶋小學校へ三圓、眞言寺基本財産へ三十圓、浦臼神社へ三圓、石狩川沿岸道路修繕費へ十五圓等を寄附せり、氏の妻女は同郡羽浦村字宮村田中家より來りふさ女と云ふ、長男才治郎長女やうの二女すみゑ等の諸子あり、氏も又苦心慘勝の結果成功せる開拓家にして一度び三十七年六月石狩川洪水の爲め大損害を受けたるが、卅八年度より次第に蓄積し七八百圓の貯財を得て養蠶業に従事したり、氏現在の農業収益は小豆一反歩四俵半大豆一反二石小麦一石六斗裸麥一石六斗豌豆一反六斗等なりと云ふ、公職組長二ヶ年間三部長空知廳長より二ヶ年間現在衛生部長の職にあり。

郷里 石川縣江沼郡鹽津村字小楯辻

現住地 上川郡鷹栖村十四線六號

庄田庄藏氏

資性温厚實直にして勢力を以て資本としたる熱心なる農耕家庄田庄藏氏は弱年にして本道に航し、赤裸一貫餘財なく知人を傳りて農耕の見習奉公人となり主に仕へる誠心誠意其の功に依り、資本の土地を分與せられ遂に晩年成功して苦心の農耕家と稱せらる、亦庄田氏の如きは蓋し多からず氏は加賀の人明治十四年五月十四日郷里に生る先老間與門氏二十三年六十三歳を以て逝す(氏の十歳のとき)母

(四九五)

ちか女存命同村角井久助氏二女入室、氏は其の長男に當り家代々農業に従事す幼時簡易小學校に修學後家事を援けて農事に従ふ長するに及んで氏や空しく郷關に踟躕するを欲せず、一度北海道開拓を思ふてより雄心禁すべきもあらず、明治二十九年三月廿一日郷里出發單身本道に航し上川郡鷹栖村荒谷初吉氏を傳りて同家の農場に入りて農耕見習奉公入たる賤事に甘んじ、夜々營々零細の資を貯へて他日の素を爲さんとして辛酸に忍び難苦に耐ゆる五星霜、其の心勞誠勤空しからず主人荒谷氏の信用を得る多大精勤の功に依り、十四歳五號に於て資本として二町五反歩の土地を分與せられ茲に初めて獨立農耕に従事するの基を開き更に三浦定治氏より土地一戸分三百三十圓に買收して、爾來專心之が成盤に従事し曉に星を仰ぎ夕べに月を踏み勤勉一日を思はずして、遂に七町五反歩の成盤を告げしのみならず、別に水田開發を計畫して二町三反歩を開くの今日の成功を來せり而かも初年度成盤は二反歩にして小豆を試作するの側ら出而の勞働に従事し、水田開發を計せしは四十年にして八反五畝歩を開き一反歩一石三斗を收め四十一年度は二町歩一反歩八斗の收穫ありたり、氏は又公共慈善の篤行家にして第四尋常小學校建築費に三十圓寄附、淨福寺建立費に八十圓を喜捨せし如き赤十字社員に列り其他公共慈善に資を寄せ木盃褒状を受くる數次、令圖は同郡同村小谷忠平氏の二女ろめ子入室愛國婦人會員たり、三十一年に實母を郷里より連れ寄せ今や母堂は悠々殘軍を一家和合裡に樂み氏は拓殖界に貢獻して居村の信頼を受け徳望を博す真に頌すべき哉。

郷里 和歌山縣西牟婁郡三舞村字久木三百卅七番地

現住地 石狩國雨龍郡秩父川村二百卅九番地

新谷留吉氏

(五九五)

出で、は戦場の勇士となり入つては農家の良民となる勵精努力新谷氏の如きありて、屯田兵制度の本道開拓に寄與するところ僅尠ならざりしを知る、氏明治十四年九月十八日要助氏の三男として郷里に生る、父は天保五年九月七日生にして母堂くに女郷里中野氏より入室して巖に亡す新谷家は世々農業とし祖父兵右衛門氏まで郷の里正たる五代に及ぶ、氏の學歴は單に郷里の尋常小學校補習科を卒業せるに過ぎず然れども活社會に立ち活智識を収むる尋常學窮者流と其趣を異にす、世界は大學校なり之の哲言慧敏なる氏に於て徒爾ならざるを見る、氏は二十八年三月廿二日一家五口令兄兵次郎氏が屯田兵として渡道するに隨ひ、郷里出發田邊より紀代九に乗込み明了九に乘換ひ神戸より土佐九に乗込み小樽に上陸汽車を空知太に降り、徒歩秩父別屯田兵村に着したるは同年五月十五日にして令兄は直に屯田歩兵第一大隊第一中隊に編入されしが三十五年三月三日死亡せるを以て、氏其後を襲うて戸主となり、兵役を相續したり日露兩國々交破れ干戈相見ゆるに際し三十七年八月七日の勳員にて後備歩兵第廿五聯隊第一中隊に編入、同年十月十七日小樽に派遣され守備勤務となり、翌年一月廿九日後備第

二師團を編入同月卅一日小樽守備隊撤去同年二月三日上等兵に進級、同月七日出征の目的を以て札幌を出發し、同月廿五日大阪着四月廿五日大阪出帆同月廿九日北韓元山津に上陸五月四日元山津出發咸興、城津を経て六月十三日吉州に着し、七月四日より八月十三日まで推須附近の戰闘に参加し、八月卅一日昌斗嶺の戰闘に九月二三日は會軍の戰闘に参加、十月三十日會軍に於て武器係助手及び給與係助手を命ぜられ、十月廿三日會軍出發凱旋の途に就き廿六日清津着同日清津に於て乗船廿九日宇品着十一月四日廣嶋出發十一月廿五日復員解隊となる、此役の功に依り勳八等に叙し白色桐葉章一時金百五十圓下賜從軍記章を授けらる、氏屯田兵現役中銃劍術教育勉勵に付褒狀及び學術成績優等證書善行證書を付與さる、亦以て氏が軍務に對する熱心と素行とを徵見すべし、氏は秩父別尋常高等小學校増築費及備品費の寄附をなせる外に四十二年七月擊劍會を組織せられ村内より寄附を募り、無事に其目的を推行せられ、氏は常に公共慈善の事業を贊助するに於て人後に落ちず、公職としては居村第五部長を命ぜらるゝあり、又村社の氏子總代に推され、四十一年六月一日以來村會議員に當選するもの二回以て現在に及べり、氏今や五町歩の耕地並に一町三反歩の水田を有し、中産以上の農民として重望を負ふ、令聞は浦川徳松氏の令妹たつ女人室、嗣子長男太郎二男早苗長女とみゑ子の二男一女を擧げて家内和合亦能く衆人の羨む處たり、氏の如きは眞個新開地の模範成功者と稱すべきなり。

郷里 愛媛縣越智郡東伯方村字木浦

現住地 石狩國夕張郡角田村東北大學農科大學附屬第六農場

白石源太郎氏

氏本姓は塩田氏、家元と農を營む、三代の主人業三氏に至つて酒類醸造を業とす、初代堅一氏の時分れて一家を成し白石を姓とせるもの八助と稱す、是れ氏の祖父にして家系傳へて實に七代に達す、父を權吉と云ひ今尙は壯健に、母しか女は明治三十一年三月二十三日五十三才にして歿す、氏は其の三男にして明治八年七月十三日を以て生る、父權吉氏は村總代を経て村會議員として常に村治に熱心す氏は本浦尋常小學校を卒ゆるや、直に今治小學校に入り、二十五年三月全科を卒業す、後伯父鈴木重吉氏に従ひ航海の業に就くこと四ヶ年、九州及び東京灣より普ねく日本の海岸線を周航す、明治三十年五月北海道渡航に志し、遂に單身小樽に上陸し、知人小林長三郎氏の夕張郡長沼村戸長たるを便りて同村に土着す、蓋し其の目的とする處は本道の地味亞麻の耕作に適するを以て、之が栽培をなし、以て備前備後の地方に輸出せんとするに在り、即ち資金四千餘圓を投じ、種子を栃木地方に仰ぎ、八十町歩を栽培せるが、不幸非常の凶作に遭ひて、所期の計劃全然失敗に歸せり、茲に於て一大英斷を以て耕地の全部を擧げて、一反歩二圓の料金を以て貸し、再興以て家産を興すべきを誓へて歸國せり居る事一年ならずして捲土重來の策熟し、明治三十一年二月再び渡道し、直ちに雜貨商店を開き朱備

の利を収むる事三年即ち明治三十四年に及び、翌三十五年九月傍ら農科大學第六農場看守の職を奉じて其の經理の任に當り、拮据精勵して今日に至り、毫も倦怠の色なし。

氏天資温厚にして篤實、義務の念厚く責任を重んじ、居住管理する處の農場の整理、其の成績の良否を以て念とし、亦た他を顧みざるもの、如し、されど衆望の歸するところ辭するに山なく、現に同村第八部長として村政を賛げ、又増徒總代として奉佛信法の道にいそしむ、而かも身を以て公共に盡すを以て足れりとせず、勤勉節約して財をさくぐること亦た鮮しとせず、曩きに阿野呂小學校建築に際して金十五圓を寄附して道廳長官より木盃一個を賞賜せられ、又角田村巡査駐在所の建築を聞きて金五圓を寄附し公私諸般の出資を厭はず機宜に應じて能ふ限り盡さる無し。

室あゝ女は兵庫縣水上郡貝原町大島直一郎氏の長女にして、長男貢を擧ぐ、斯の如く勤勉なる氏は、夙に水田開拓の計を樹て、自から鋤を手にして、野地泥炭地にして、殆んど他の顧みざる地所を開墾して懈るなく、遂に三十七年には一反を拓きて一反歩三斗の收穫を見、翌三十八年には三反歩にして其の收穫また五斗に達し、三十九年には一町歩五俵を得、四十年には六反歩一石七斗を得るに至り、目下貸付地五町歩を耕作し、試験的に大小豆を自作しつゝ有りて、他日の成功大に期して待つ可き者ありと云ふ。

以上は氏が經歷の一般にして、此他傳ふ可きもの素より多々ありと雖も、煩を厭ひて省略すと雖も、

特に一言すべきは家世々内地にあつて商業を事とし、爾かも中學卒業の身を以て、自から農耕の業に従ひ、今日の成功を致せるの事なりとす、由來農業を以て下層人民の執る可き業務と信するは古來の通弊にして是れやがて我邦産業の不振なる一大原因なりとす、本道拓殖の遅々たるまた此故に外ならず、編者は氏の如き人物を本道農界に得特に此編に收め得るとを斯界の爲めに喜ばざる能はざる也。

郷里 富山縣下新川郡飛彈村

現住地 上川郡東旭川村下五號線北四番地

飛彈野佐助氏

携ふる處の資僅に二百金遂に能く、八町歩余の耕地二町歩の畑地五町歩余の水田とを成墾し得たる余力を以て居村の發達に盡して信望隆々たる、氏の如き苦心の農耕家にして本道に存在するあるは、眞に拓殖界健全の所以なるべし。

氏は越中の人、嘉永三年十月二十日郷里飛彈村に生る、父は七郎右衛門氏祖先は飛彈國の住人にして飛彈野高野山老人とて有名なる浪人なりしと、父の代に至り、故あつて富山縣上新川郡山室村大字江口に轉住せりと、氏は八歳の時より家計を援けて農業に従事す、長ずるに及んで空しく郷關に老いんよりは北門に別天地を拓くは男子の本懐なりと思意し、明治三十一年三川携ふる處の資僅かに二百金

(〇〇六)

家族十一人を舉げて渡道東川村に至り小作農其より東御料地二十號地に於て、印田九郎右衛門氏より貸下荒地一戸分五町歩を金三十五圓に買受け、開作に従事する五ヶ年にして成功せるを他へ二百圓にて譲り渡し、東川村西十號北三十二番地に於て自針常次郎氏の小作農に従事する事一ヶ年間、三十六年更に現住地東旭川村下五號線北四番他に於て五戸分（凡二十五町歩）の小作權を代金四百二十圓にて譲受け、爾來銳意専心開拓に従事して現に有する成功地は耕地八町歩畑地二町歩水田五町歩なり、水田開發に従事せしは三十七年度にして、初年は二町四五反歩の成功なりしと、而して水田收穫は三十八年度より四十年迄の四ヶ年間は年々良好にて一反歩五俵宛を得たるも、四十一年四十二年度は不作にして一反歩四俵宛の收穫に過ぎざりしと。

令室のよ女（同縣中新川郡水三ヶ村浦野長助氏の三女なり）嗣子は長男源次郎二男清次郎三男鶴次郎長女はる二女と三女と四女と四女みよ子の三男四女を舉ぐ、而して二男清次郎氏は赤十字正社員にして三十七年十二月徵兵適齡にて第七師團二十八聯隊第六中隊へ入營、三十七八年の役樺太守備隊勤務に依り一時金五十圓從軍記章を下賜せらる。

氏又公共慈善に篤く、現に居村の伍長組長井部長等を勤め第六教育所設置發起人世話人たり、其の教育に公共事業に喜捨義捐する枚舉に遑なし、又嗣子源次郎氏は克く父の意を体し家政を授くるを以て土地成業の速かなる他多く其の比を見ずと云ふ歎すべき開拓家なる哉。

郷里 岡山縣備中國小田郡宇度村宇度谷

現住地 上川郡愛別村番外地

樋口文藏氏

小作たるの卑に甘んずたるは、他日雄飛の素を得んが爲なり、辛酸何んすれや意に介せんやと其の勞に耐へ、遂に獨立成功の基を樹てたる何んぞ其意氣の旺にして氣力の壯なる前途の發展も識者を要せざるなり、氏は備中の入明治元年四月郷里に生る、先老仲次郎氏明治十年十月十四日四十五歳を以て逝去、母こう女同十一年九月二十六日歿す、氏は其の長男にして家代々農を業とす祖父は民次郎氏と稱す、居村の膳煎役を勤め行商を兼業せりと、氏同郷人にして北海に移住するもの其多くは成功を博しつゝ、あるを見雄心勃勃々遂に意を決し、明治三十一年二月家族六人と共に本道に渡航し上川郡比布村横山清五郎氏に頼り、一ヶ年間小作農に従事、同年十一月より愛別村金宮農場に於て豆腐屋を開業し爾來勤儉力行孜孜として倦まず、勤勉三星霜に及び多少の余力を生じたる際偶々時の駐在官吏の勸むるあるに應じ、現住所に旅館を開業して今日の成功を來したるなり。

妻女は同村川上三代作氏の長女りよの子嗣子は和一郎氏と云ふ。

氏は又公共に盡し、下愛別村小學校に三十七圓を寄附して道廳長官より褒狀木盃を下賜せられ、日露

(一〇六)

(二〇六) 戦役債券若干にも應じたり、現時の公職は部長を勤む、氏は始め小作として農耕に勵み後豆腐屋業を開きて其の業に勤勉する事三星霜、更に進んで旅人宿を開始して遂に今日の成功を來しに到る、氏の勤儉力行眞に偉なりと云ふべき也。

郷里 徳島縣那賀郡羽野浦村
現住所 石狩國樺戸郡浦臼村字キナウスナイ

森川常五郎氏

口堅忍を説く好く之れを實行し得たるの人幾人かある口能く苦守自重を云ふ、之を事實にしたるの士幾干かある、森川氏の本道拓殖界に立つ盡く之を實行せり、盡く之を事實にせり、粒々辛苦乏しきに耐へ、意氣の銳志を守つて撓まず遂に浦臼の地に成功す傳へて以て後の事を爲さんとするの士の示例と爲さるべからず、氏は阿波の人、父を源七氏と云ひ三十九年七月八十貳歳を以て現住地に没す、母をたか女と云ひ、全郡岩脇村屯本善兵工氏妹女にて氏は其長男に當り、慶應元年十二月三日を以て生る、家世々農を業とす、氏の學業は羽野浦村元舊幕師匠近藤先生に就て學び後小學校に入る、北海道渡後友成農場に於て十九ヶ年間農事に就き、現今所有耕地拾八町自作貳町小作六戸を入れて拾六町歩を貸附す、氏が内地より出發の際資本金五百圓を持參、友成農場より荒地三町歩を分與せられ外

に成墾地拾五町歩を他より買ひ受けたり、所得税決定額は四百圓、日露戦役に拾圓を献納し木杯壹個を下賜せられ、又鶴沼尋常小學校、浦臼神社、眞言寺基本財産參拾圓等各所へ寄附を爲す、氏の妻子は全郡今津村字鳥尻佐々木清藏氏三女よし女と云ふ、長男寛二男政次郎の二子あり、氏は勤儉家にして常に農事を力行し、今日其基礎を固むるに至りしもの皆粒々辛苦の結果なり。

郷里 徳島縣那賀郡羽野浦村字羽浦
現住所 石狩國樺戸郡浦臼村字黄臼内

森川鹿助氏

(三〇六)

事を畫し、克く之を決行するは多く少壯の時代に在りと雖も此の時代に於ては所謂才智餘りに迸發して事往々實際を離れ冒險的に傾き甚しきに到つては空想的無謀に陥るものあり、青春事を過する多く其の才機を以て自らすると稱するも敢て過言にあらざるを知る也、而して森川鹿助氏や年少纔かに二十餘歳にして商業界に一大成功を稱するある、眞に北海拓殖界の異數と云はざるべからず、氏は阿波の人父を源七氏と云ひ、明治三十九年七月現住地に於て七十九歳を以て没す、母をたか女と云ひ全郡岩脇村字岩脇屯本善兵工氏妹にて今猶存命せり、氏は其三男に當り明治七年八月生る、長兄は常五郎氏、次兄は六三郎氏と云ひ世々農を業とす、氏の父は分家し本家を徳右衛門氏と稱す、學業は羽野

浦尋常小學校を卒業して後徳島市藍商吉見宗治氏方へ十四歳より十九歳まで見習奉公に入り、廿五年三月即ち十九歳の折北海道に志し生國を出發す、家族六人同道小樽に上陸、浦臼村に移住を定む、當時人家も無く道路も無かりしか友成士壽太郎氏の農場に入り三晝夜雪中に住居し、此間に小屋掛を爲し開拓に従事したりと云ふ、廿九年十一月獨立商業に従事し雜穀仲買を始めたるが此間五ヶ年に二千五百圓を貯蓄せり、三十四年九月廿四日分家し全年十月家屋建築して荒物雜貨店を開き是より専心商業に勵精したり、氏の公職は組長、單麻耕作總代眞宗寺總代を爲し四十二年六月村會議員に當選す、氏は耕地拾町歩畑地小作拾戸入を有し、所得税四十五圓を納む、氏以赤十字正社員にして日露役債券貳百圓を應募、駐在所學校赤十字病院寺院等に數百圓を喜捨せり、氏の妻女は新潟縣南蒲原郡今町武田龜之亟氏の四女きよ女と云ふ、實に無資本の身を以て今日の成功を遂げ、商業界の信用家となりしは又有數の人物と謂ふべし。

郷里 兵庫縣三原郡八木村

現住地 石狩國夕張郡角田字栗山市街地

家系 森本儀平氏

氏は明治七年二月を以て生る、父を齋藤慶藏と云ふ、其の五男なり、家世々鍛冶職を業とす、小學校

に在學すること五年、中等第三級を修了するや、全部北阿滿村に往き、伯父安田磯藏氏に就き其の業を學ぶ時に年十四、居ること九年技術大に進む、二十九年三月志を立て、單身本道に渡り栗山村在住の森本藤藏氏に倚る、當時栗山は戸數僅かに七八戸に過ぎる未開の樹林地にして、今日の發展到底夢想し能はざりき、然れ共氏は深く前途に期する處有り、永住を期して鍛冶業を開始す、實に明治二十九年四月一日の事なりき、藤藏氏深く其の爲人に見る處あり養ふて子と爲し娶はすに長女あい子を以てす、因て森本姓を冒す、氏の實父藤藏氏は明治十九年七月十日五十一歳にして没し、生母こを子尙健在せり、而して氏は養父藤藏養母ちよ女に任へて孝養最も努め一家和樂して春風常に薫するが如し氏性活潑機敏にて才氣有り、爾かも義侠に富み常に公共を以て念となす、嘗て惟へらく、北海道開拓の功を早からしむるは農業の進歩に在り、農業の進歩を期するは農具の改善より急なるは無しと、乃ち思を凝し志を潜め、百方苦辛を重ねて遂に輕便有利なる「除草器」を發明し、北海道農會に寄せて學士博士及び専門家の批評研究を求め、更に改良を加へ、明治三十七年中農商務省特許局より實用新案特許を受け、三十八年來汎て一般の需用に應じて頗る好評を博す卅九年更らに「アヲオー」種蒔機の發明に着手す、斯の如く本業の傍はら力を發明に注ぎ寸隙なきに拘はらず、二級町村制實施に當り、舉げられて村會議員となり、尙は第一部長を兼ね、常に村治の爲めに熱心努力し、日本赤十字終身社員として愛國恤兵の至誠を表し、加ふるに平塚直治、有松岩太郎の兩氏と三十四年佛教青年會を組織

し、青年の修養佛教宣傳の爲めに知名の學者高德の士を聘して講演會を開く等、其の熱誠驚くべき者有り、常に曰ふ、農具の改良と公共事業の爲め、若し寸効ありとせば、他は顧るに足らず、其の製作に係る農具アヲオ、ハロー、及除草機は北海道共進會に於て一等賞五二共進會に於ては銀牌一個、北海道農會よりは有功賞を受くるの榮譽を博し、栗山尋常高等小學校新築費に金十五圓を寄附して道廳長官より木杯一個、日露戰役恤兵部に金六十五圓を献じて賞勳局より木杯一個を賞賜せられ更に昨年度に於て栗山尋常高等小學校新築費に金百五十圓を寄附する等篤行其の云ふ處に一致す。

郷里 京都府大和國宇陀郡宇賀志村字木郷
現住地 上川郡愛別村上伏古教育所長

森本菊藏氏

殖民地に尤も重んずべく魚眉の急を告ぐるは教育の獎勵にあり、教育の普及にあり、而して心靈界に開拓を急なりとすれば全力を教育の獎勵普及に注がざるべからず、氏安政六年十月十五日郷里宇賀志村に生る、父を勤七郎氏明治二十六年九月十八日七十四才を以て母たみ女同十八年五月二十四日五十四才を以て共に死歿す、氏は其長子なり家世々農を經する七十九代に達する舊家たり、父勤四郎氏に至る迄代々居村の庄屋役を勤めたる家柄なり、氏は少將元寺小原時代龍庄寺住職磯田禮讓氏に學び八

歳より十五歳まで具田小學校に修し、卒業後岸和田藩の儒者土屋弘氏に就き三ヶ年間漢學修業後東京に出て下谷區練塀町石川塾に入り、更に漢籍を專攻して造詣頗る深し、明治十七年十一月崎玉縣北安達郡捺松小學校教員一ヶ年奉職後大坂府下泉田日根郡新家小學校同府西成郡池田小學校等に轉任、奉職する事二ヶ年明治十九年辭して郷里に歸り、宇賀志村助役を勤務する六ヶ年一度北海開拓の志を抱きて明治二十四年七月十二日家族三人と共に渡道、愛別村ルベスベに森本善次郎氏を頼り同十一月一日愛別村尋常小學校長に赴任するに至れり、其當時の生徒は男女合して三十七名初代の教員は鈴木魁助氏二代は桑原義雄氏森本氏は三代目なりと云ふ。氏は斯の如く伏古教育の重任を双肩に擔ふ、益々健全に教育事業に盡瘁せられんとを望むなり殖民地に畝く可からざるの事業眞に森本氏を多とせざるを得ず。

愛別村伏古教育所の沿革をだに記せん、居村の篤志家時西初三郎大西守衛諸氏の發起にて明治三十四年元伏古八線に六間に四間の假校舍建築同六月開校。
明治四十年七月十日上伏古三線五號地に間口十間奥行四間の本校舎新築移轉。
現時の生徒數七十五名内男三十六名女三十九名なり。
現校長は森本菊造氏明治四十一年二月赴任。

郷里 和歌山縣西牟婁郡鮎川村字下平

現住地 上川郡當麻村字伊香牛

森脇林之丈氏

教育家として児童教育の任を完ふし、令名を諡はる、是れ事業家の事業界に成功し農業者の開拓界に成功したる其の理一なり、難い哉教育者の任や何んぞ其の任の大と小とを別たんや、蓋し教育者の難さ大學の総長なると一村長の教職たるを問はざるなり、氏は明治十年一月五日郷里に生る、父は森平氏と云へ、母やよ子と稱し其の長男たり祖父周平氏より氏に至る五代の舊家にして祖父は居村の里正たる人家代々農を經し、傍ら薪炭業に従事す氏は少時小學校全科卒業後寺元塾に入り又濟氏に就き漢學の專攻して造詣頗る深し長ずるに及び川添小學校に教鞭を執ると二ヶ年、是より先父森平氏は明治二十八年四月家族の人と共に本道に移住愛別村金富農場に在り、氏は三十年一月父を頼りて渡道同年二月深川村深川小學校創立せらるゝや其時に當り、教職たる二ヶ年三十二年一月下愛別教育所創始に盡力して三十三年八月迄教鞭を執り、三十三年十一月現住地伊香牛に轉居同教育所創立の任に當り新築開校後校長の職に在りて教鞭を執る七星霜、氏今や教育界の開拓を完ふして校長の職を辭し奮然更に商業界に轉じて居村の利便を計らんとす、昨は教鞭を執りし手に今は算盤を友として倦まず撓まず、商業に従事するの傍ら尙は當麻村學務委員の職に在りて益々教育の普及に盡瘁しつゝ、あるは又得

易からざる人士なるかな。

令園は徳島縣麻植郡川田村字町住友半兵工氏の二女くら子入室。

氏は又公共慈善に篤く、伊香牛教育所建築費に十圓寄附道廳長官より木盃褒状を賜り其他公共慈善の事に義捐喜捨する數回、而して氏の商事に投じたる資金や是れ教員在職中に貯蓄したるものなりと云ふに於て氏の勤儉力行眞に欽仰すべきなり。

郷里 和歌山縣西牟婁郡三栖村

現住地 石狩國樺戸郡新十津川村

森 磯平氏

少壯にして慣性の桑梓を去り單身遠く荒寒の未開地に投じ獨力奮闘農耕牧畜に成功し、殆んど立志編資料として半生の美跡を留め、其の春秋に富みて前途の仲力豫測し難き森磯平氏の如きは弱行者流の好砭針と稱すべきなり、氏明治十三年二月十日先考市太郎氏の長男に生る先考は嘉永六年生にして郷里高地吉兵衛氏の長男森家の養子たり、母堂やす女安政四年に生る祖父尙七氏祖母たか女雛に亡す、氏の家は三代前に分家せられしものなりと云ふ、氏幼時郷里三栖小學校に入り士族廣畑惇吾氏の教育を受く、其後郷里に染戸羽竹家に職工見習をなすこと二ヶ年胸中起業成功の志燃ぬんと欲するの氏は

(一〇六)

碌々手足を展すの餘地なき郷里の小天地に鬱屈するに堪はず、血氣旺盛なる十九歳の青年は三十年五月下旬郷里出發單身奮然として渡道室蘭に上陸、暫く母黨の従弟中根正七氏の新十津川村字上徳富に在るを便り、同所に於て小作農業に従事すること一ケ年間に於て卅三年二月同村字總宮地に於て一戸分の荒地を買入れ墾拓五千坪成功、翌年四月更に一戸分の未開地貸下を受け墾拓農耕に従事せしが氏炯眼時運を看破し牧畜を以て農耕よりも利益ありとなし、牧畜に轉業の階梯として豚を買ひ入れて蓄殖に努む後ち之を賣却し三十七年九月瀧川村五徳園より雜種牝牛一頭を四十五圓に買ひ入れ、三十九年八月より牛乳販賣を開始したるが、氏の畜策皆圖に當り大に牧畜業に成功し、現に飼牛十四頭を有し猶ほ道廳より母牛一頭の貸下を受け専心養殖に従事せり、氏は牧畜業の發展に伴ひ牛酪の製造をも開始したり、氏空知郡外三部産牛馬組合新十津川村區長に推選され各農家に對し牧畜業の獎勵を爲しつゝあり、氏公共事業に盡力すると共に慈善事業にも心を用ひ卅七八年戰役に際し恤兵部へ献金或は函館火災に際し救済費に義捐せる如き枚舉に遑あらず、氏の美なる半生は眞に傳ふるに足る者ある也

郷里 鹿島縣鹿島市

現住地 石狩國夕張郡角田村字ボンウエンベツ

森 啓藏氏

(一一六)

氏は舊鹿島の海士森彦左工門氏の長子にして、嘉永六年八月を以て生る、家世々島津公に任へて食祿十石を給はる、薩藩に在つては固より小身の稱を免かれずと雖も、所謂百二都城の壯夫、軍人々種特種の氣風は士分の高下を以て規すべく無し、况んやペルロ一と度豆州下田に來りしより、海内豁然として鼎の沸くに如も似て、三百年來允武太平に慣れたる徳川の家臣、哀れ其昔し誇れる三河武士の勇風意氣尋ねるに由なく、薩南雄藩の丈夫密かに太刀を擁して蹶起するの時に際す、其の精神的感化や蓋し知るべきのみ、年少漢籍を今淵新左工門氏に學び、又武術を修めて只管風雲の至るを待てるや論なし、然かも世は王政維新となり、同藩の先進西郷吉之助大久保市藏は廟堂に入り其他の諸士亦明治政府の大官となる、十四才の少年たる氏が、密かに胸を躍らし羨望瞻望せるの狀想ふ可きなり、斯くて歳月忽々丁年を超ゆる四才功名手に唾して起たんず時、帝國の威望を双肩に荷へる大西郷南洲翁は征韓論に破れて故山に歸臥して後、遂に新政厚徳の旗旆を翻して罪を政府に問はんとするに至る、吾時至れり、先生に盡すは此時なりと直ちに馳て旗下に投じ熊本に出で大に川瀬に戦へぬ、然れ共不幸遂に先生が城山の露と消へてより、嗚呼吾事終はんとし、念を功名に絶つて農に歸せんと志し、丁丑の亂治まれる翌明治十二年北海道に渡航し、職を開拓使函館支廳に奉じ七重試験場在勤を命せらる、開拓使廢せられ農商務省所管に移され、三縣廢止し道廳を置かるゝや北海道廳農商課に在勤し、明治二十五年十二月官制改革の結果非職となるや、其素志を果さんため地を南穂に相して自から農業に従

(二一六)

ひ、拮据精勵すること二年、適ま同郷の先進湯地定基氏農場を經營するに當り、特に氏を撰びて其の管理者たらしむ、氏大に其知遇に感じて至誠を傾け献身以つて其の經營に任じ、耕地の整理を行ひ、小作の撰定其の方法の畫策に苦辛し、忠實精勵の功空しからず、遂に二十九万坪を成功して十六戸の小作を納れて附托を完ふし任に在ること實に十二年、終始一日の如く其忠實勤勉敬嘆に堪へたるもの有り、明治四十年管理の任を辭して水田一町三反歩を自作しもつて今日に至り、錢鏝壯者を凌ぐの意氣ありて、平靜なる田園生活に、靜かに半生の歴史を顧み時世の現態を觀じつゝ、有りど、好翁請ふ幸ひに健全にして幸福にあれ。

郷里 新潟縣北蒲原郡佐々木村大字上中澤

現住地 上川郡鷹栖村八線三號

森田巳三太氏

志を北海に抱きて開拓の難業に成功し餘力養蠶業を經して綽然たるのみならず、居村發達の設備に盡して理想の邑たらしめんとし、灌漑工を暨して水田開發に力ひる森田巳三太氏の上川郡鷹栖村に名聲を轟はる、固と其の理吾人は等しく成功者間と雖も、森田氏の如き高潔なる人格ある士に推服するものなり、氏は越後の人明治二年二月五日郷里に生る、先老意久吉氏三十八年五月七日六十五歳を以て

(三一六)

現住地に於て逝去、母ふじ女健在本年六十六歳に達す、氏は其の長男にして家世々農業を經す森田家は元村上藩時代里正の職を奉ずる十代以上に勳績せり、氏幼時佐々木小學校則清小學校に修學全科卒業後則清村役場雇員となり、二十一年獨立養蠶業に従事する十星霜偶々北海開拓の有利なるを耳にするや雄心禁ずる能はず、遂に意を決し明治三十一年五月單身本道に航し旭川町四條通三丁目に親戚森田長作氏を傳りて農業に従事此の間本道農耕の状態を探検視察して地を鷹栖村オサラッペに卜し、同處八線三號元尾崎豊之助貸下荒地一戸分を八十間に買求め、三十七年十一月一旦歸國して家事を整理し三十八年五月更に家族と共に渡道現住地八線三號に移住爾來専心、之が成墾を期し尙ほ又耕地三十町形代價三千圓にて他より買受け從て成墾すれば從つて土地を買收し、孜々として倦まず遂に克く成墾今日の現在を來せり、氏は又農耕の傍ら養蠶業を營み施設着々功を奏し家運益々隆盛人皆な其の成功を湛ゆ、明治三十八年六月二級町村制施行せらるゝや鷹栖村々會議員に推選せられ又最も一村の名譽職たる基本財産委員に推され明治四十年九月土功組合の組織あるや、其の理事に選ばれ多大なる盡力ありたる爲め木盃及び慰勞金數回贈與せらるゝ、光榮を得第四尋常小學校建築委員となり、其の建築費に寄附して長官より木盃褒狀を賜る等公共慈善の事に資を投ずる枚舉に遑あらず、斯の如く居村の施設發達にひとして氏の盡力を煩さるなし、氏の人格を想見すべく氏の名望を以て鳴る故なきに非ざるなり。

郷里 山形縣東田川郡新堀村大字門田
現住地 石狩國札幌郡札幌村大字丘珠

關原清藏氏

軍人としては聖旨を奉戴して日夕軍人たるの本分を保たんと期し、一私人としては父を援けて開拓に成功し而かも一家四人の軍人を出して軍國の義務を完ふし、國家に貢献する實に世に珍らしき關原家の名譽人皆な羨まざるなし、氏の父を寅吉氏と云ひ母をとめ女と云ふ、氏は其長男にて明治九年十一月十一日丘珠村一番地に於て生る、郷里の家は代々農を業とし祖父を市太郎氏と云ひ、祖母徳女は明治三十七年三月現住地に於て歿したり、氏の祖父は明治二年酒井公十二人小役の先導として來り開拓陣屋を開き七ヶ年後秋田戰爭に會し濱益に於て兵を練り戰爭に参加す、其後丘珠に移住農業に就きしは明治十一年六月なり、又氏の祖母は濱益山中に巖取に赴ひき澤中に銅の觀音像を拾ひしとして其名あり、村名を賀田村と命じたりと云ふ、氏は明治廿九年十二月徵兵適齡の爲に月寒獨立大隊補充砲兵隊に編入し、三十三年十月旭川七師團野戰砲兵大隊に轉隊し同年十一月廿日解隊となる、砲兵上等兵なり、三十七年八月八日露戰役動員に依り後備砲兵七聯隊に編入し、後補充隊第一中隊に編入し守備隊勤務、三十九年十月廿九日解隊となれり、三十七八年戰役の功に依り勳八等瑞寶章一時金七十圓を

下賜せらる、弟宇吉氏は三十三年工兵となり、其弟倉治氏、其又弟作次郎氏共に歩兵となる、氏の家庭は四人の軍人を出し實に世に珍らしき家柄にて以て軍人社會の誇りとするに足る。

郷里 石川縣羽咋郡南邑知村字菅原

現住地 石狩國上川郡愛別村字フレナイ六線四番地

故 昔農與四太郎氏

養嗣子 仝 修作氏

故與四太郎氏は万延元年六月十五日郷里に生る、未亡人きき女明治元年二月七日生る氏は同村字二口前田藤四右衛門氏の三男にして昔農家へ養配せられ養嗣子修作氏に至る迄五代、世々農を經し氏は殊に農業熱心家にして村中よりも賞揚せられし程なるが、不幸にも内地居村に於て米作は年々凶害に襲はれ不作のみ打續き爲めに生計上の困難に陥りたる矢先、偶々北海開拓の有利なるを聞知するや斷然渡道に意を決し明治三十一年十二月の移住團體を組織し、三月十七日單身卒先して郷里出發小樽港に上陸、旭川町二條通五丁目谷忠吉氏を頼りて出面行商して愛別村に來りしが又々不幸にも其年の大水害に遭遇して宿泊せし、小屋は流失する漸くにして家根に登り電信柱に縋り辛じて一身の危ふきを遁れたる等三十一年は斯の如き不幸のみに遇ひ空しく一年を經し、翌三十二年三月愛別村に於て未開地

(六一六)

貸下を出願移住す出働き行商等を爲して漸く二十五金の資を得たるを以て米一俵、味噌一樽を買求め該出願地の開作に着手せり、當時の此地たる人家は勿論道路もなき一畝唯だ茫々たる不毛の原野殆んど手を下しの余地なきを銳意専心開拓に従事して今日あるに至れり。

養嗣子修作氏は明治二十二年二月八日郷里南邑知村に生る、實父は北野徳兵衛實母はぎの女と云ふ其の五男に當り北野家は當代に至り五代の舊家にして、代々農を業とす學業は七才より十才迄居村尋常小學校に十二才より十五才迄子浦高等小學校に學修す、氏の北海開拓に志したるは三十六年三月にして單身小樽に渡航、上川郡下愛別村に令兄邦吉氏に頼り兄弟共同して荒物商業に従事せしが幾日もならずして不幸令兄邦吉氏は旭川竹村病院に於て病死せり、故に店を閉づ十月四日歸國するの止むを得ざるに至れり、後同村山本作太郎氏に就き指物業を見習中三十八年六月十三日昔農與四太郎氏病死の報に接し同十一月十四日郷里出發、同二十五日愛別村昔農家へ養配せられたるにて妻女は昔農與四太郎長女さよ子なり。

先老與四太郎氏は敬神の念深く、殊に移住當時菅原道實公を尊信し本國より繪像等を持參四十年度に部落共同して一の祠を建立し福原喜右衛門氏は木像を遷宮せり、又四十一年度には志々見力藏谷原五右衛門諸氏と共に愛別村字中島の地に中島神社を建立せり。

嗣子修作氏は斯の如く先老を意志を繼ぎ敬神慈善の志篤く下愛別村尋常小學校建築費へ金十圓寄附、

北海道廳より瘡狀木盃を下賜せられ、中島橋架橋工事に多大なる盡力せし如き乘福寺寺號公稱に付六十圓喜捨せし如き以て見るべし公職としては部長の重任を負ふ、又十勝線空知郡上富良野村西五線北百六十六番地ヨホロカンベツに於て耕地五町歩の貸下地を岡田長松氏より金百圓に買収して、自ら其の開拓に従事する等農耕に熱心なる畢居村に名聲高しと云ふ、先老與四太郎氏の早世惜むべきも近くものは還らず幸に嗣子修作氏の遺業を守つて家名を辱めざるあり與四太郎氏又以て瞑すべきなり。

郷里 岡山縣吉備郡大井村字大井町

現住地 上川郡永山村百五十一番地

須賀大作氏

(七一六)

兵農二事を完ふして綽然餘裕を示し意氣の鋭尙は開拓に志す至誠たらざれば能はざる處、殊に須賀氏の天理教に神念篤く事に當りて堅忍天下何事か成らざらんや、氏は備中の人應應元年十一月十五日郷里に生る、先老龜之助氏二十三年八月二十日六十五歳を以て母みつ女十八年十二月十六日四十一歳を以て共に逝す、氏は其の長男に當り祖父鹿之助氏祖母さみ女と稱せり家代々商業に従事する九代氏小學校卒業後商業見習の爲め大坂に出で、十四歳より十九歳まで同地備後町五丁目太物商堀藤太郎氏に見習奉公を勤め歸國後古物商を營む二十四年六月本道屯田兵を志願し同十五日本國出發、本道に航し

(八一六)

小樽に上陸、永山兵村百五十一番地に移住屯田第三大隊第一中隊に編入、清戦役起るや二十八年三月臨時七師團に編入、海外出征の目的を以て小樽港より汽船東京灣管中平和となり歸屯其の功に依り功勞金二十五圓從軍記章下賜さる、日露の國交破る、や三十七年八月七日動員下令に依り後備歩兵第二十八聯隊第四中隊に編入、旭川宿營八月三十日解隊更に十二月二十二日第二十六聯隊に編入第四回補充員として屯營出發字品港より乗船、三十八年一月八日ダルニー上陸同月二十五日金州に於て第二中隊に編入、北進して騰賓堡に着せしが不幸病氣に罹り海上病院船に護送二月二十七日字品港に還送せられ廣島病院戸山病院を経て歸郷療養五月八日復隊第一中隊に編入、同十一日第五中隊に編入替となりて八月九日除隊三十七八年戰役の功に依り勳八等に叙せられ一時金百圓從軍記章を下賜さる。移住當時の作付は裸麥、大豆、小豆等にして初年は一町五反歩水田開發を經營せしは三十六年度より同年は二反歩中作一反歩一石五六斗三十七年度は二石以上にして八反歩自作、三十八年度八反歩二石以上三十九年度同上二石八斗四十年年度三石四十一年度二石八斗内外四十二年度一町七反歩中作。令室は兵庫縣三原郡德野村下崎貞藏氏の妹こと子入室長男榮、二男直人、長女さみ、二女なみ子の四子を擧ぐ。

現役當時は兵村會員ニ夕年間公有財産委員引續部會員たり、又力を教育事業に盡し永山小學校建築費に十五圓寄附道廳長官より木盃を下賜され、山來至誠天理教を信じ而かも氏の意氣や鋭前途更に大なる發展を來す期して見るべきなり。

郷里 和歌山縣西牟婁郡元栗栖川村字小崎

現住地 石狩國雨龍郡深川村妹脊牛紀の國屋旅館

芝崎千代吉氏

(九一六)

事を起す必らずしも難とせず之を成す之を守る即ち至難たるなり、芝崎千代吉氏や忌憚なく評すれば其の性行其の人物乃至其の事業敢て異彩あるにあらず、唯だ時勢の進運するを看破して人の企及す能はざる事業を成せし也、功業寧ろ平凡何等一軸を抜く底のものにあらず然れども此の平凡庸俗の事寧ろ人生の至難に屬す世人其の性行を稱揚する亦所以なきにあらざるなり、氏は紀州の人嘉永六年二月七日郷里に生る、先老乙平氏母ねさく女共に逝す氏は其長男に當り家代々農耕に従事す氏空しく郷關に老ゆるを欲せず、雄心北海の新天地に寄せ子孫百年の計を定めんと明治二十九年四月家族六人と共に厥然本道に航し、雨龍郡秩父別に土井太藏氏を頼り移住して三十一年十一月迄農耕に従事せしが、後湯屋開業の目的を以て妹脊牛に居を轉じたるも少しく考ふる處ありて其を變更し、更に家屋を新築して三十三年六月初めて柚夫の宿業を開始して、爾來銳意専心斯業の擴張に勉努力して其の効空しからず、今や一大旅館となり妹脊牛の紀の國屋旅館と世人の稱揚を受くるの一大成功を來しに至りた

り。

室は同村高原土井養藏氏の三女相續人長男真吉、二男次助、三男虎一、長女きよ子の三男一女を衆ぐ氏は妹脊牛に於ける旅人宿業開始の鼻祖にして、爾來力を居村の發達に盡し老來貧氣を衰へず公共慈善の事に義捐喜捨する數回氏の精勵氏の意氣壯者顔色なしと云ふべく氏も又偉なるかな。

郷里 新潟縣刈羽郡南條村百十六番戸

現住地 上川郡東川村西六號北八番地

清水善作氏

氏性温厚農事に熱心にして殊に佛教を信じて信念荷くも迷はず、清水氏の開拓界に成功を贏ち得たるもの此の荷くも迷はざりし信念に在り篤教至誠事に當りて堅忍天下何事か成ざらんや、氏は越後の人嘉永二年二月二十九日郷里南條村に生る、先老善四郎氏母のり子其長子たり家世々農を業とす氏に至る三代、學業は居村の神主五十嵐導翁氏に學び爾來農事に従ひ又他を顧みず然れども空しく郷關に老んは氏の志に非ず北門の天地に飛躍して別乾坤を開き一家永住の基を開かんと、明治三十四年六月三日家事を整理して資金千二百金を携へ家族六人舉て渡道し室蘭に上陸、旭川町五條通西倉重次郎氏に頼り東川村六號北十番地に川本倉三郎氏の貸下地一戸分を金四百二十圓に、又六號北八番地一戸

分を金三百五十圓に樋垣喜助氏より又北七番地半戸分を百六十圓に山下伊平太氏より購求して、銳意開墾に従事す、又三十九年二月五號北一番地一戸分を百八十圓に朝倉延次郎氏より譲り受け倍々専心農事に勵み十年の辛勞遂に今日の成功を來しに至りたり、妻女は郷里廣田村小黒重次郎氏の二女とわ子嗣子貞太郎氏始め三男二女を衆ぐ。

氏又公共の念篤く現に公職にあるもの東川村組長より土功組合議員、第七部長等にして赤十字正社員たり、又東川村小學校の建築増築費等へ數回出金寄附して賞を得るもの數回東旭川村光明寺建築費へ金圓を喜捨せる等其德行推して知るべし清水氏も又偉なる哉。

郷里 愛媛縣宇摩郡妻鳥村字松本四百六十三番地

現住地 石狩國上川郡東川村西二號北二十一番地

篠原喜五郎氏

氏は苦心の精農家なり難に耐へ、苦を忍び粒々辛苦身を挺して堅忍自重遂に嚴たる農家たるを贏ち得たるの人、氏は愛媛縣の人明治五年四月二十四日郷里に生る實父初吉氏實母ひら子は氏の幼時三四歳にして死別れ義父關藏義母とら女に養はれ九歳より十二歳迄、居村妻鳥小學校に學び養父を援けて農耕に従事する事數年、而かも思へらく空しく郷里畝圃の間に老ゆるも一生北海の野に理想の家を爲

しも一生寧ろ北門の天地に理想の家を爲さんと奮躍本道に航し爲しあらんとを期し、單身明治二十九年四月二十八日郷里田發渡道し、上川郡東旭川村南五丁目三百九十番地村上榮太郎氏方に頼りて同氏の農事を援けると一ヶ年、翌三十年三月十日吉辰を卜して東川村西三號北十五番地に居を定め單獨農耕に従事する十有余年其の間能く勞難を排し千苦に耐へ粒々の辛酸零細の資を貯へ、細粒荷もせずして他日發展の資に供せんとす、果然明治四十二年三月二十八日更に現住地西二號北二十一番地へ轉居して尾崎助之進氏の成功地一戸分一万五千坪を代價千五百圓にて譲り受け、又西七號北二番地にある山地源助氏の所有耕地二町五反歩を千三百圓を以て買受け、爾來専心之が經營に従事して現在耕地七町五反歩水田五町歩を所有するに到れり、公職は居村の九部長にして四十二年十二月上川支廳長より任命せらる。

氏性温厚篤實にして殊に公共慈善の事に志篤く現に東川村小學校建築費へ數回の出金寄附せし如き、又前年宮城縣岩手縣福嶋縣等の凶作地へ義捐する事數十金、爲めに木杯褒狀の下附せられたる枚舉に逸わらずと云ふ妻女はとく子河野岸太郎氏の長女にして氏に嫁するや、克く内助に耐へ篠原氏をして今日あるに到らしめたる興つて功多しと云ふ、篠原氏の如き堅忍自重の奮闘家にして今日の成功あるもの由來偶然にあらざるなり氏も又偉なる哉。

郷里 佐賀縣杵島郡六角村大字西郷二百八番地

現住地 石狩國雨龍郡秩父別村

末津伊助氏

北門の鎖鑰を嚴にし邊疆拓殖を急とするの聖旨を奉體し、屯田兵として多年親める郷閭を離れ遙々未開の寒境に移住し其の任務を完遂し土着成功を贏ち得たる者何んぞ限らん、末津伊助氏の如き蓋し亦其の一人なりとす、氏明治三年七月十一日父與市氏の長男に生る母かつ女廿四年五月五日三十九歳にて歿す、初め與市氏は鍋嶋藩士にして代々里正を勤めし杵島郡福富村故重富惣太郎長男たりしもの嘉永三年三月一日末津家の養子となりしなり伊助氏は屯田兵に採用され、明治二十八年四月下旬家族七名と共に郷里を出發し渡道小樽港に上陸、五月十五日秩父別屯田兵村に到着屯田歩兵第一大隊第一中隊に編入され、爾來軍務に農業に勉勵せるの績及び公共心に富みたりし事は氏の履歷書に盡くせり氏資性實直にして虚飾なく勤儉産を治め其の居村の部長を命せられ村會議員、學務委員に選舉さるゝが如き以て氏が信望を博せるを知るべし其人豈傳へざるを得んや。

四十年二月八日依願免札幌監獄看守札幌監獄、四十年二月廿八日巡查看守退隱料及遺族扶助料法に依り一時金三十八圓を給す内閣恩給局、四十年三月農業に従事す、四十一年三月五日秩父別村第五部長を命す空知支廳長、四十三年六月一日秩父別村會議員に選出せらる、四十三年六月十日秩父別尋

(四二六)

常高等小學校學務委員に選舉せらる。

郷里 新潟縣中頸城郡高城村字大橋

現住地 石狩國札幌郡札幌村大字丘珠

菅井喜久治氏

本道に於ける土地開拓の急なるは勿論なりと雖も亦殖民地に最も重んずべく、焦眉の急を要するは教育の普及にあり教育の奨励にあり、否な寧ろ形而上心靈界の開拓を急なりとす而かも菅井喜久治氏の本道移住以來二十有余年間子弟の教育に全力を盡ぎつゝある、眞に得易からざる拓殖家と云ふべきなり氏は父を貞一氏と云ひ明治七年六月喜久治氏十一歳の折に歿す 氏は元治元年十月十一日を以て生れ長男なり、氏は舊高田海士にして祿二百石を賜はり、父の代に至る迄御目附役たり、廢藩後父は海立學校脩道館の教育に従事し又岡島小學校教員を勤む、氏の學業は初め脩道館に入學後小學校に入りて卒業し、高田中學を半途にして醫學に志し醫師杉木氏に就き二ヶ年間修業後新潟醫學校に在學二ヶ年にして後見人伯父死亡の爲め退學し新潟縣刈羽郡安田小學校教員を拜命す、明治十五年より十九年三月迄教育に身を委ねしが同年四月北海道に渡道小樽に上陸、又も札幌郡札幌村丘珠小學校に就職したるは同年六月十五日なりき、廿一年八月北海道廳長官より教員免許狀を受け、三十三年學務委員

に選舉せらる、氏の相續人博愛氏は四十一年札幌農學校農藝科を卒業し臺灣總督府技手となり、二男義郎氏は札幌郵便局事務員たり、又三男禮一氏は現に札幌中學修學中なるが長女ふじ女は札幌高等女學校を卒業し現に上川郡永山尋常高等小學校教員を拜命し居れり、氏は生涯を献身的教育に従事すると云ふ又歎すべきかな。

郷里 宮城縣栗原郡栗駒村字沼倉

現住地 石狩國上川郡永山村千四百四十九番地

故 菅原瑕丸氏

教育家而して屯田兵斯して兵農二事に成功す、寔に氏の學識人格の移住當時已に群を抜く山來居村に重きを爲すもの偶然にあらざるなり、氏資性英敏事に處して果斷公共熱心にして力を居村の發達に盡ぐ人其の明に服す、氏は慶應元年二月十五日郷里に生る父を友太郎氏と稱す天保十三年五月十三日秋田縣雄勝郡畑等村字畑に生る、母をゑん女と云ふ栗駒村蘇武善左衛門氏の二女入室氏は其の長男たり祖父は秋田縣雄勝郡畑等村字若畑の人、佐藤利左衛門氏と稱す祖母たけ女と云ふ實友太郎氏七歳の時、其の父利左工門氏死去せる爲に實母たけ女と共に現郷里栗駒村に移住せられたるにて瑕丸氏は幼時栗駒村岩ヶ崎小學校に修學、全科卒業後十五六歳より教鞭を執りて教育に従事後栗駒村役場に職を

(五二六)

(六二六)

奉じて一村に知らる、偶々本道に志あり一度北門守備開拓二事の忽にすべからざるを悟るや慨然北海道屯田兵を志願し明治二十四年六月八日家族と共に渡道、永山兵村に移住して屯田第二中隊に編入爾來兵農二事に従事す、二十七八年日清戦役起るや動員下令に應じ臨時七師團に編入出征の目的にて屯營出發小樽より乗船東京滯營中平和となり歸屯、其の功に依り慰勞金手當從軍記章を下賜さる、三十七年日露の國交破れ動員下令と共に出征の令に接したるも、不幸明治三十九年一月三日四十二歳を以て現住地に於て病歿す、嗚呼氏の如き未だ春秋に富み前途倍々多望なる有爲の人物をして早く白玉樓中の客と爲す天無情なるか惜みても尙あまわりありと云ふべし。

郷里 石川縣羽咋郡南邑知村字菅原

現住地 上川郡愛別村字フレナイ五線丙三番地

志々見徳松氏

氏は明治元年八月八日郷里に生る、父は力藏氏母ゆき女と云ふ其長男に當り兩親とも今に存命なり家

代々農を經し氏に至る四代、父は全縣鹿島郡金丸出村服部平右工門氏の二男にして志々見家へ養配せられたるなり、學業は少時寺小屋時代明專寺住職に就き三ヶ年間修業し後父を助けて農業に従事す三十二年縣下福原喜右工門氏發起の北海道移住團体の一員に加はり二月十一日單身渡道小樽に上陸、上川郡愛別原野字フレナイに於て八月分の貸下許可を受けたるは三十八年四月二十五日なりき、尤も渡道當時一ヶ年間ば旭川町二條通り五丁目谷原忠吉方の出面働きをして二十五金を貯へ、飯料として黍二石米一俵を買入、三十二年三月より右貸下地の開作に従事せしが當時該地は人戸とてなく又道路もなき樹林にして一望唯だ是れ不毛の原野殆んど手を下しの道なきを、氏は苦艱經營樹林を伐り荆棘を開き一意専心開拓に従事せし結果、耕地拾町歩自作拾町歩を有し黍麥小豆大福豆等を賦作し現在薄荷小豆を自作す居れり、是より先明治三十四年三月郷里に残し居りたる妻ふて女(同縣同郡南志雄村字散田北山庄右工門氏の長女)及長男甚之助氏を來道せしめたり氏は又公共慈善の事にも篤志にして三十七年下愛別尋常小學校建築費へ金拾圓を寄附して道廳長官より褒狀に木盃一個を下賜せらる、又榮福寺建築費へ五圓四十錢改築費へ六拾圓を喜捨せし如き日露戦役債券七十五圓に應じたる等、氏の公共慈善の事に盡したる其の一般を知るに足るべく公職は組長たり、氏も亦開拓成功家の一人として稱しべきかな。

(七二六)

郷里 茨城縣結城郡生村字箕輪

現住地 石狩國上川郡鷹栖村十一線六號

杉山清助氏

人生世路の難を歎ずる勿れ、唯だ能く分を守り分に應じ懺々たる功名富貴の悲を去り徐々として發展を畫策せば人世寧ろ安を見るべし、何等其の險峻を見ざるべし杉山清助氏の性行や這般好箇の典型實に是れ具體的説明者たらん也、氏は文久三年十二月十二日郷里に生る父市右門氏母の女家世々農を經す杉山家は三百年以來の舊家にして箕輪村の創業家を以て重視せられ、實兄泰助氏は大野村長の職に在りて名聞あり、氏は其實弟二男に當り幼時水海中道小學校に七歳より十四歳迄修學卒業後東京に出て神田猿樂町英和學校に入り英語漢學を專攻すると一ヶ年、又東京府下体操傳習所に入り体操科を修業する一ヶ年にして卒業、後芝金成小學校に教鞭を執ると二星新明治十六年三月徵兵適齡を以て第一師團に入營六ヶ月にして抜適せられ近衛師團に編入、二ヶ年間勤務滿期除隊となり北海の開拓漸く世人の視聽を索き府縣團體移氏の成功を事にするや、氏奮躍北海移住に意あり明治二十四年十月三日意を決し資本三百金を携ひ單身本道に渡航小樽に上陸、札幌に叔父横山才助氏を傳り二ヶ年間請負業を手傳へ二十六年五月上川郡鷹栖村十一線六番地に移住して爾來開拓に従事、明治二十七年日清戰役起るや、同三月七日屯田兵臨時七師團に召集出征の途に就き東京滯營中平和克復となり歸屯除隊せ

らる二十七八年戰役の功に依り懋勞金三十七圓從軍記章下賜せらる、爾後農耕に従事す精勵好く家族を勵すと共に勤儉力行一粒の微を苟くもせずして他日の資を爲し、次第に成功の歩を進めて遂に今日の現在を來すの礎を爲せり、令閭は石川縣江沼郡三木村小谷忠平氏の長女よし子入室氏は又力を居村の發達公共事業に盡し第二第四小學校建築費に十四寄附道廳長官より木盃を下賜され、公職は組長土功組合議員に推され赤十字社修身社員たり、氏は能く分を守り分に應じ懺々たる功名富貴の巻を去り徐々として發展を畫策せんと欲す氏眞に傳ふべき也。

郷里 山形縣東村山郡高橋村字高橋

現住地 上川郡鷹栖村十一線十一號

鈴木常治氏

名門舊家たるの勢威に戀々せず、本道開拓の國家事業にして北門の鎖鑰を完ふするの道たるを了し渡道後又殊に殖民地に尤も重んずべく焦眉の急を告ぐるは教育の獎勵と普及にあるを感じ、上川郡鷹栖村に去嘯して學務委員となり、校舎増築監督委員となり全力を教育の獎勵と普及に盡きつゝある鈴木常治氏の人格に服するものなり、氏は農を以て起る力を居村の教育發展に盡すの國家の爲めなるを知れる識者なり近文小學校の設けられたるも將た校舎増築を完成されたるも盡く、民盡瘁の賜物なりと

云ふに到つては氏の教育普及に盡したるの功偉大なりと云はざるを得ず、氏は安政二年十一月九日郷里に生る、先老惣太郎氏と云へ氏の四歳の時死亡す母常女廿五年四月二十六日六十四歳を以て歿す家世々農を營む祖先是惣太郎代々其の名を継ぎ元祿年間に分家して氏に到る八代の舊家たり、氏幼時寺小屋時代本家鈴木惣太郎氏に就き修學長するに及び北門開拓の等閑に附すべからざるを悟るや、慨然移住に意あり、明治二十八年六月單身本道に航し長谷川庄四郎氏を傳りて拓殖の状況を視察し土地探見を爲す一ヶ年其の結果上川郡鷹栖村を相して一旦歸國、更に翌二十九年三月家事を整理して資金千八百圓を携ひ家族七人を擧げて渡道室蘭に上陸、鷹栖村に移住して同村第一線十一の丙號に於て根室の人松本末吉氏貸下荒地一戸分四十六圓にて買收し、爾來銳意開拓に盡し遂に全部を成墾し得たるもの現在を來せり、而して移住當時の作付は粟稻黍小豆等にして稻黍の收穫一反歩四石五六斗たり水田開發を經營せしは三十九年度にして初年度は五反歩一反歩收穫一石五斗、四十年一町三反歩四十二年度二間歩餘と次第に年の進むと共に水田開發を擴張し、傍ら村民を説いて水利組合を組織し、躬ら其の常務委員となりて土功を督する等、氏や由來何事も模範的を理想とし農事の改良に教育の獎勵に誇々の辨を絶たざる之を教へて倦まず、餘力を公共事業に盡し殊に近文尋常高等小學校増築に付ては其の監督に任命せられ、百日以上日夜盡瘁して其職責を全ふし及學務委員光照寺壇徒總代等の重任を双肩に擔ひ其他慈善事業に喜捨して木盃瘠狀を受くると數次、吾人は氏の健全に益々公共事業に盡瘁

せらせんを望むものなり殖民地に最も缺く可からざるものは教育事業の獎勵普及にあり、吾人眞に鈴木氏を多とせざるを得ず。

郷里 山形縣最上郡新庄町

現住地 石狩國夕張郡角田村字雨煙川農科大學第五農場

鈴木久重氏

長槍一條主君の馬前に報効を期するの武士、家庭に生育し一朝世變に逢うて翻然として決するところあり犁鋤を以て刀劍に換へ着實なる農業に一身を委ね應分の貢獻を試み、本道拓殖に資益する渺からざるに於て豈傳へざるを得んや、氏慶應元年十月二日戸澤藩邸に生る考繁彌氏歿し母堂みつ子健在氏幼時郷里小學校に學業を修め十九歳にして家督相續せしが、時勢洞觀に隻眼を具するの氏は農業を未開地の本道に經營せんと欲し、明治三十一年四月一日資金約二百圓を懐にし上川郡旭川町に渡來せり然るに農業適地の貸下を得る能はず止む無く翼を歛めて、同年六月より職を本道巡査に奉じ旭川警察署に勤務し、翌三十二年九月辭職現住地に移轉農科大學第五農場看守奉職餘暇を以て該看守所附屬地五町歩を耕作し茲に漸く初志を達するに至り、爾來拮据匪勉農耕に従事し家計益々豊に成功者を以て目ざるゝの榮譽を擔へり、令嗣貞治氏明治十五年十一月六日山形縣北村山郡東郷村に生る幼時同郡東

根小學校に學び、卒業後同郡沼澤小學校に奉職次いで山形縣師範學校講習科に業を卒へ三十四年四月東郷小學校訓導奉職三十七年三月辭職、同年四月より翌三十八年九月まで正則英語學校豫備科に學び同年十月より四十年二月まで日本赤十字社書記奉職、同年三月北海道廳上川支廳に奉職九月上川郡神樂村西御料地第一尋常小學校訓導奉職、翌四十一年七月辭職同年八月十三日夕張郡栗山尋常高等小學校に奉職爾來勤績教務に盡瘁せり、鈴木氏眞個好和積者を得たりと謂ふ可し本道拓殖の基礎を鞏固ならしむるは着實なる、人士の移住を以て急となす父は農業に子は教育に立脚して本道拓殖に貢献する鈴木父子の如き又前に稱揚せざるべからざる也。

郷里 愛知縣東春日井郡元片山村(現今改正)鷹木村大字牛山

現住地 石狩國上川郡愛別村上伏古一線三號

鈴木金七氏

如何に多數の家族を有すればとて父子和せず、兄弟親まざれば焉んぞ其成功を贏ち得んや鈴木家の父子兄弟一家舉て和親協力以て北海開拓に貢献する又多大なりと云ふべし、氏は明治十一年十月二十五日郷里に生る、父は新八氏母はとく子兩親とも健全其三男に當り長兄は鐵次郎二兄覺次郎氏と稱す祖父龍右衛門氏代々農を業とす、同兄鐵次郎氏本道開拓に意あり明治二十六年五月屯田兵を志願し一家

八人舉て渡道元上川郡當麻村屯田第二大隊第二中隊に編入、自來兄を援けて農事に盡し其の克く家兄に仕へる至誠なりしと云ふ、四十一年分家して愛別村元當麻村屯田公有地に轉住爾來農耕に精勵從事して今日の成功を來し耕地數町歩を有し現時は湖荷栽培にも銳意盡力し居れりと云ふ。

氏は又公共心に篤く、三十八年三月二十日愛別村伏古教育所建築費に二十七圓を寄附して道廳長官より褒狀木盃を下賜せられ、又夫が發起人にして建築工事監督補助員囑托せらる現時の公職は第六部長たり、氏尙は春秋に富み將來益々開拓貢献しべきの人大いに自愛自重せよ。

郷里 德島縣那賀郡羽野浦村字宮倉

現住地、石狩國空知郡下富良野村字山部市街地

尾花綱藏氏

堅忍を練とし自重を經とし、而して克己阻勉遂に能く大成したる尾花綱藏氏の如きは推して以て當代立志家の師表と爲すべきなり、氏は阿波の人明治二年十月を以て郷里羽野浦村字宮倉に生る先老は信藏氏と稱す、母をはな子と云ふ氏は其の三男たり世々農耕の業に従ふ幼時村塾に學び卒業後父を援けて家業に従事す、長するに及び北海の新天地に雄飛の念あり偶々一家を擧げて北海道屯田兵の募集に應じて渡道の企つるあり、氏の令弟兵藏氏戸主となり明治二十四年六月沼貝村美唄兵村に移住し氏又

〔四三六〕

同時に渡道して農耕に従事する三星翁、更に同縣人にして有名なる開拓家たる樺戸郡浦臼村の友成齋士太郎氏の農場に入りて克く辛酸に耐へ拮据精勵數星霜友成氏、深く氏の勤勉に感じ土地一戸分を贈つて其の勞に酬ゆ、氏の之を成懇するや友成氏亦之を五百金に買收す尾花氏勇躍該五百金を資本として富良野山部の地の將來有望なるを看破し直に同地に移住して農業開拓に従事す、時に明治三十六年なり、翌三十七年更に荒物雜貨店を開く氏の烟眼過たず山部の發達と共に氏の家業倍々發展し遂に山部屈指の一大商店なる今日を來せり、氏今や耕地の外宅地三戸分を所有し専ら力を居村の發達公共事業に盡せる功に依り北海道廳長官より木盃褒狀の下賜を受くる數回、名聲噴々山部の重鎮として知らるゝに到れり克己匪勉の賜もの亦大なる哉。

郷里 愛媛縣宇摩郡松柏村字下柏

現住地 上川郡東川村基線千五百十六番地

高橋松藏氏

高橋氏は上川郡東旭川村に於ける熱心なる開拓家なり、而して又温良なる慈善家なり文久三年九月七日郷里に生る、實父は伊勢吉氏と云へ實母をしな女と云ふ實父は既に亡す母は健在氏は其の二男にして同郡同村親戚高橋家に養配せられ、養父は市治氏に稱し天保十三年五月十日生れ健在養母は既に亡

〔五三六〕

す高橋家は居村の舊家なり、氏は夙に志を本道に抱き北門の新天地に一飛躍せんを欲し雄心禁せず明治二十八年四月家族五人と共に本道に航し小樽に上陸、先に屯田兵を志願して移住しある令弟春吉氏を兵村に傳り此處に一ヶ年間農耕の手傳を爲し、二十九年東御料地十二號南十四番地に一戸分を貸下地を受け農耕に従事せしが、後現住地東旭川村基線五號千五百十六番地元屯田兵村の公有地を借り受けて居を轉じ、後右土地を買求め爾來銳意専心農耕に従つて又他あるを顧みず遂に今日の成功を來たし熱心なる農耕家として大に其の名を知らるゝに至れり、令聞をさく子と云へ慶應二年九月十三日生長男長太郎、二男多三郎、三男宗一、長女いせの、二女まさの、三女いぐゑ、四女あさよの三男四女を擧ぐ、氏は又公共慈善の事に篤く基線五號線の教育所東御料地小學校建築費に資を寄せて道廳長官より褒狀の下賜を受け五號線金比羅神社及寺院等に喜捨する等枚舉に遑まらずと云ふ、氏の如きは眞に終始ある農耕熱心家と謂ふべきなり。

郷里 德島縣美馬郡茂清村字天神原

現住地 上川郡永山村九十四番地

藤井かく子女史

上川郡永山村に到つて吾人一種の感と與へらるゝあり、是其風光風俗に非ずして女傑藤井かく子女史

の人格なり、女史性活潑慈善心に富み男優りの稱あり而かも明治式女流高襟が虚偽虚榮の悪風に驅られ名實相伴はざる風俗生活を敢てするに反す、之れは天保式頑強の女傑が鐵石の如き決心を以て家計を斷行し以て商業農業を経営し千挫百折不撓不屈底の勇敢を鼓舞して資産を造り、一郷に其の雄を誇稱するの奇觀なり、女史は阿波の人天保十三年十一月五日郷里天神原に生る實父北岡留藏氏實母いし女氏は其の三女に當り代々農業を経す、後同縣阿波郡伊澤村字小倉原村藤井家に繼母として養配せられ養父伊三郎氏は既に逝き亡夫を久三郎氏と云ふ、卅二年七月二十二日現住地に於て逝去す而して氏は三十五才の中歳を以て亡夫久三郎と結婚せられ藤井家は代々藍製造仲買業たり、北海道に渡道せしは明治二十四年にして戸主要太郎氏の屯田兵を志願して、家族四人と共に其の家族の一員となりて本道に航し永山屯田兵村に移住して共に開拓の事業に従事せられ、亡夫久三郎氏と共に藤井家の再興に力を協せ一意専心勤儉貯蓄に力め子孫の教育繁榮に意を注ぎ、今は元屯田時代に給與せられし土地五町歩を堅守して一家を圓滿に維持し倍々安樂に生活を持続し居れり、氏は二十八年度より分家して永山村六丁目九十四番地に於て屯田司令部より許可を得て荒物商店を開き得る處多大なりしが、四十一年度に及びて都合上商業を中止せり、氏は又公共慈善の志篤く三十七年戦役の際は軍軍費補足の趣旨を以て金五十錢献納の儀道廳長官園田安賢男より聞届けられたる如き、又永山村小學校増築費へ金四圓を寄附して道廳長官より褒状を下賜せられ、日露戦役國庫債券三圓に七十五圓應募して奉公の誠を

盡し旭川町四條通四丁目成田山真久寺の世話役を勤め四十圓を義捐せる等枚舉に違わらず、又第四回稻作立毛品評會審査の成績に依り永山村農會より褒賞を授與せらる、女史の如きは眞に篤行の女丈夫と謂ふべき也。

郷里 山梨縣中巨摩郡南湖村百五十一番地

現住地 石狩國空知郡香江村字内大部

深澤龍平氏

農民粒々の辛苦は到底他衣暖食の徒の窺知す可きに非らずと雖も、世人の厭みて顧みざる山地の原野を拓き、満山をして一大良圃に化すたらしむるが如き尋常一様の薄志弱行輩の得て能くす可きに非らず、深澤龍平氏が苦心の美譽として今日香江農民に模範的人物と稱せらるゝ眞に故ありと云ふべし氏は慶應元年正月十四日郷里に生る、父を右平氏と云へ文政十一年十一月十五日生母何子文政十一年四月七日生祖父は與治兵衛氏祖母はさく女と稱す、父右平氏は滋賀縣蒲生郡木村村田源左衛門氏の長子深澤家へ養配せるなり、氏は其長男に當り家代々農を経す氏は南湖學校に教鞭を執り幼時南湖小學校に學び、明治十八年十月三十日徴兵適齡にて東京第一師團補充として歩兵第一聯隊に入營二ヶ年服役三十二年十月三十日除隊後農業に従事、日清役起るや二十七年十二月卅日召集令に應じ横須賀要塞砲

兵第一聯隊同臨時東京灣守備隊米ヶ濱砲臺守備を命せられ、休戦後功に依り賞金二十五圓從軍記章を賜はる、氏夙に志を本道に抱き北門の開拓せんと雄心禁せず明治三十五年十月三十日土地視察の爲め單身本道に航し空知郡音江原野に入り其の有望なるを見移住に意を決し、翌三十六年三月一家九人を擧げて更に渡道音江村原野に二百分の貸下を受けて現住地に居を定む、氏の貸下許可を受けたる當時の地たるや、全部高斜面の山地原野にして世人の厭ふて顧みざる土地たるを銳意専心開作に従事、樹林を伐り荆棘を開き高斜面の山地に地段を付ける等苦心經營の結果山地原野は化して一大良圃となり、遂に今日の成功を見るに至り現に有する耕地十六町歩小作三戸を入れ自作五町歩其の重なる作付は大豆小豆小麦等なり。

氏は又力を公共事業に盡し現に村會議員、村農會副會長及郡農會代表者等に推選せられ名聲を博する堅忍不拔の意氣眞に偉なりと云ふべし。

郷里 石川縣能美郡中海村字荒北

現住地 天鹽國上川郡多寄村三十四線東一號

◎北野牧場 北野作松氏

天鹽國上川郡多寄村に於ける創業家として知られ、又成功者として謳はれたる北野氏吾人は其の偉大

なる超群の意氣非凡の堅忍者なるに服すると共に、又氏の本道に於ける辛酸勞苦の大堅忍大自重遂に克く開拓界に成功して家門の繁榮を來したる精力の偉大なるに依らずんばならず、氏は加賀の人明治四年三月四日を以て郷里に生る、父は義兵衛氏母ふで子氏は其の長子たり家代々農を以て起ちしも父義兵衛氏商に轉じ、氏其の意を繼ぎ少壯にして商に従事す然れども郷關に憑爾として老ゆるは氏の志にあらず、明治三十年本道飛騨の壯圖を抱きて渡道同年五月深川一巳村屯田兵北野福松氏を力に深川に荒物雜貨店を開き經營四星霜得る處少なからず、三十五年天鹽國多寄方面の開發され前途の有望なるを看破するや、同年十二月居を多寄に轉じたるも當時の多寄たる人家もなく停車場は建築中にて人夫の小屋一棟ありしのみ、氏は是を此處に止め依然荒物商店を開き又待合所を建て荷扱店を開設して漸次市街地開創の畫策に盡力せり、三十八年に至り他人の貸下地を譲り受け農場開墾の目的なりしも困難なるを以て牧場に經營變交して四百七十五町歩を得、更に百五十町歩の貸下を受けて農場とし今や全地積を成功せしめ良牛良馬數十頭を飼育し、大に前途の發展を畫して餘力を公共事業に盡し道路開墾費に上多寄尋常小學校建築に氏は其の發起人となり、卒先建築費に寄附して道廳長官より木盃褒状の下賜を受け、又公職としては多寄村會議員上川産牛馬評議員等の榮職を帯び倍々居村の發展に盡瘁しつゝあり故に一村擧つて氏創業の偉才に敬服せざるものなし又偉なる哉。

郷里 滋賀縣栗太郡金勝村東坂

現住地 上川郡愛別村字ヨウコシナイ

三浦糸太郎氏

山は剛嚴堅忍の氣を養ひ海は潤達恬淡の心を養ふと古來人材と地理とは密接なる關聯を見る、則ち北人の勤勉忍耐財商略の才あるに比し南人は豪快恬淡武人膽畧の氣あり、而して糸太郎君三浦氏の如き即ち此の南人獨得の膽畧に兼ねるに武人的恬淡の才識あるの人、氏が活躍の經歷は是實に立志編中の異彩たらん平、氏は近江の人明治八年二月二十六日を以て郷里に生る先老は直潔氏母かを子氏は其の長男たり、氏や不幸にして十一歳家倒産の厄に逢ひ十四歳父と死別の悲惨事に遭ふ氏止むなく一農家に仕へて僅かに衣を支ゆ然れども學事の研鑽を怠らず、師學以て諸學に通ず二十歳の時大坂に出で商業に従事し、又神戸に赴きて視察を了す氏熟々思へらく内地に歸路して志蹉跎の感に泣かんより若かず、北海の新天地に活躍を試みんにはと明治三十年孤劔漂然木道に航し直に雨龍郡一巳村多度志に赴き石橋農場に入りて事務員となる同時多度志に達する道路なく石橋農場の如き小作、僅に數戸に過ぎざりしが、氏銳意農場施設の衝に當り献心の熱心を以て小作を奨励し三十三年度に到り百七十町歩を成墾し三十七年度には遂に全地積に成墾を告ぐ、場主石橋氏數十町歩の成功地を分與して氏の勞に謝す氏の石橋農場に仕事せる至誠眞に傳ふべきなり、後獨立して上川郡美唄村に於て數百町歩の土

地貸下を受け、數十戸の小作人を入れ此處に多大の資金を投じて開拓事業に従事せしが都合上該地は全部他に譲り渡し、更に明治四十年愛別村字ヨウコシナイに於て面積三百二十七町歩の土地貸下の許可を受け此處に牧場を設置する到れり、而して位置は愛別村比布村の村界にして山岳及び高岳を以て天然の限界を爲せり、地勢は四面高岳樹林地を以て圍みヨウコシナイ川は北方より南に向つて場の中央を貫流し其の至便にして地味の肥沃なるは想像の外なりと、殊に同事務所々在地及牛馬舎飼地は四面恰も岩石を以て圍みたる城廓の如き低地なれば、其氣候の温暖なること解雪積雪共に他より十四五日間の相違なるを見る、斯の如き土地なれば牧場經營上頗ぶる利便にして貸下以來僅に三ヶ年間の今日に於て既に全部の成功を告げ、現在馬匹三十八頭牛二十六頭なるが肉牛は賣買頻繁の爲め籍の入れざるもの多く現在籍あるものは僅に三頭なりと其の他北海道鹽貸下上川産牛馬組合種牡牛(ニーアァー)種第十五(ロードマヨウ)號等併せて六十五頭の多きに達し且つ牝牛及び雜穀耕作の爲め既に小作十戸を入れ其の他は全部自作經營を以て成墾するに至れり、其後又美唄村に於て牧場一ヶ所成功を告げ、明治四十一年三月現住地に移轉し漸く本牧場三ヶ年間にして成功を爲したる而已ならず本年新に事務所及び牛馬舎を建築するに至る、氏は斯の如く三十年十二月以來今日に及ぶまで前後四ヶ所の大農場大牧場を開耕せるは畢竟するに熱心以て其衝に當りたるに外ならざるべく、經營策又他人の企及し能はざる處なるに依るべし、氏の現公職は上川郡地主會評議員上川産牛馬組合職員兼同會

議員等にして爾來専ら力を居村の發達に盡し居れり氏又偉なる哉。

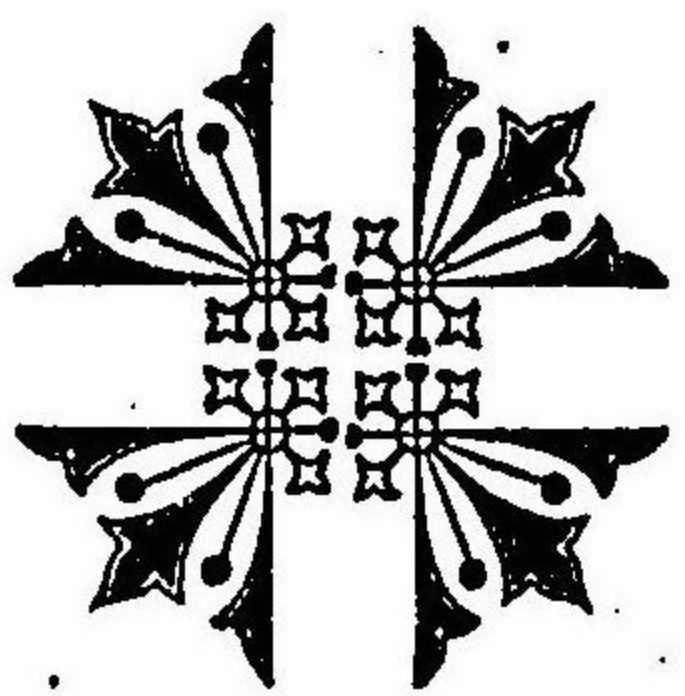
郷里 新潟縣佐渡國小木町羽茂本郷

現住地 石狩國空郡知沼貝村字美唄

海老名廣吉氏

海老名氏は空知郡沼貝村に於ける有數なる商業家なり、否な管に雜貨荒物雜穀商として知らるゝのみならず、有志家として沼貝村の重鎮として聲名噴々たり由來沼貝は空知郡に於ける有數なる大村にして幾多の問題に富むと雖も、其の町村自治の發達せる施設の完備せる又有數の名あり蓋し沼貝村自治の發達せるもの又實に海老名氏の如き有志者ある爲めならずんはあらず、氏は佐渡の人慶應三年六月廿日郷里に生る、先老は徳三郎氏母は其の二男たり家代々海産商にして兼るに農を以てし氏や幼時より北海の状況を耳にし長するに及び飛躍の念禁せず、北門の天地に別乾坤を開き子孫百年の基を掛けんと明治二十三年七月慨然意を決して本道に航し小樽に上陸、居を岩見澤に居して商業に従事す二十七年沼貝兵村の轉じ番外地に雜貨荒物店を開く、氏の敏巧なる手腕と精勵とは暮年ならずして一村の信用を博し、家業の盛大と共に名聲を知られ遂に巨商として有力なる有志家として謳歌せらるゝの現在を來せり、今や公職としては學務委員四ヶ年勤績第一期村會議員に推選せられ日露開戦に際

しては國庫債券八百圓の應募を爲し、其他公共事業教育事業慈善事業に資を寄せ財を出して木盃褒状を下賜されたる加指の暇なし海老名氏の如きは眞に畏敬すべき人士と云ふ可き也。



明治四十四年十一月廿日印刷
明治四十四年十一月廿六日發行

價定金四圓

著者 及川德兵衛

札幌區大通西三丁目八番地

發行兼印刷者 久末吉

札幌區大通西三丁目八番地

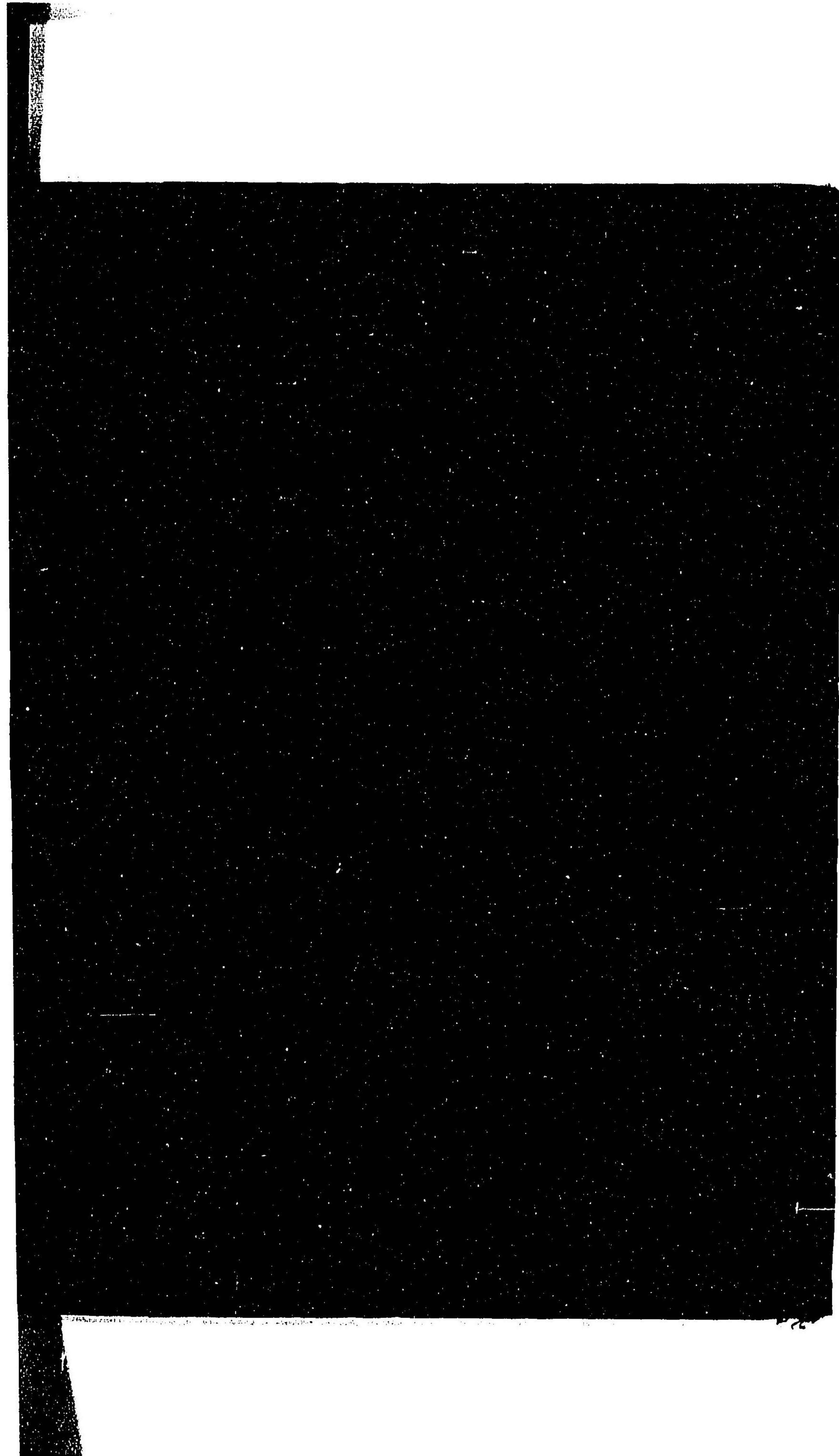
不許
複製

印刷所 博光社

札幌區大通西三丁目八番地

電話三三一番

337
152



334
152

(M)

023272-000-3

334-152

北海道発達史各村誌

及川 徳兵衛／著

M44

ADC-0144

